

2017年1月5日

みずほディーラーズアイ (2017年1月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 110.00 ~ 119.00

国際為替部 為替営業第二チーム 藤崎 一彦

■ 先月の為替相場

12月のドル/円相場は月央にかけて上値を試した後、高値圏でのレンジ取引が続き、月末には小幅に値を下げて年内の取引を終了した。

月初は、米大統領選挙以降のトランプラリーによるドル買いの流れを引き継ぎ、114円台中盤で取引を開始。米利上げ期待や、OPEC減産合意への期待などを背景に114.83円の高値を付けた。2日発表の米11月雇用統計は非農業者部門雇用者数が前月比+17.8万人増加とほぼ事前の予想通りとなり、失業率は2007年以来となる4.6%へと低下したが、相場は反応薄だった。5日の東京時間にはイタリア国民投票で憲法改正の否決が伝えられ112.87円まで円高が進んだ。その後は米株が5日連続で史上最高値更新となる中、米利上げ期待も手強い、ドル/円相場も9日に節目となる115円を試すと損切りと見られるドル買いフローを巻き込み、12日には前週末のOPEC減産合意報道による原油価格の急騰や米長期金利の上昇を背景に116円台まで上昇。その後はFOMCを控えてポジション調整と見られる売りに114.75円まで下落。FOMCの結果を受け14日にはドルは急騰し115円近辺から117円台まで上昇。FOMCによる25bpの利上げは事前の予想通りだったものの、政策金利の見通しを示すドットチャートにおいて2017年の利上げ回数(中央値)が2回から3回に増加していたことが影響した。翌15日もドル買いの流れが続き、月間の高値118.66円まで上昇した。その後は16日に中国が南シナ海で米無人潜水機を捕獲との報道や19日にはベルリンでのテロ報道にセンチメントがややリスクオフに振れ、四半期末に向けて本邦勢による外貨売りも予想される中、117~118円をコアレンジとする揉み合いが28日まで続いた。21日発表の米11月中古住宅販売件数が予想を下回り、トランプラリーによる米長期金利上昇による実体経済への悪影響への懸念が強まり、米長期金利がやや低下。欧州ではイタリア金融機関の救済問題、本邦では大手総合電機の業況懸念が伝えられるとリスクオフムードが高まった。年末特有のフローを意識する向きもある中、ドルのロングポジションを整理する動きが次第に優勢となり、29日の海外時間には116.23円まで下落。翌30日は東京マーケットの年内最終日となったが、株式市場への懸念も残る中、116.05円の安値をつける展開となった。

月を俯瞰すれば、月半ばには米利上げが実行されるも、トランプラリーの高揚感は一服した。年末にかけては市場参加者が減少する中、地政学的リスク、米景気の変調懸念、年末の特有の需給懸念などにより、やや調整色の強い展開となった。

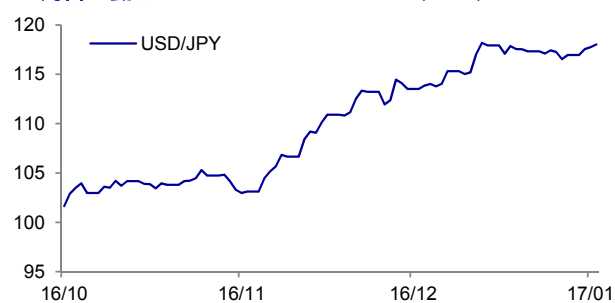
■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は、投機筋のポジション調整の動きを背景にドルが下落する展開を予想する。トランプ次期政権への政策期待も根強いが期待先行の感は否めず、先行して起きてしまったドル高、長期金利上昇の実体経済への悪影響の懸念が高まり、期待先行で作られた投機筋のポジション解消が大規模に起きることを予想。本邦では大手総合電機メーカーの業況への懸念もあり、支援の枠組が確定するまでは株式市場にも不透明感が漂い、市場全体がリスクオフムードに傾き易いと考え。本邦からの直接投資はアベノミクス発動以降、毎年10兆円を上回る資金流出に繋がっているが、世界的に保護主義の動きが強まりそうな状況下、変調するタイミングが近いと見る。本邦経常収支が大幅な黒字を計上し続ける中、ドル/円相場が2016年を通じてさほど円高に振れなかったのは、直接投資による資金流出が経常黒字と概ねバランスしていたからと推測され、動向には特に注意が必要。本邦の社内レート決定される時期は大層が2月中旬と見られるが、1月中盤以降は来年度分のヘッジに動く向きも出始めるタイミング。3月決算の企業では決算に向けた外貨売りヘッジが進み易い時期が到来することもあり、本邦勢の動向が期待先行のドル買いフローを上回る可能性が高いと見られる。昨年12月末から3月末までは急速に円高が進んだこともあり、特に注意が必要な時期に入る。

注目のイベントは6日(金)発表予定の米12月雇用統計、20日(金)のトランプ大統領就任だが、実体経済以上にトランプ氏の動向に注目が集まる。トランプ氏の掲げる政策には平仄が合わないものが混在しており、どのような優先順位がつけられるのかが注目される。現在のマーケットは、強権的かつ保護主義的な通商政策推進、インフラ投資の推進による国内景気浮揚、財源として民間資金の有効活用を上位に据えている節があるが、トランプ氏がドル高への懸念や長期金利上昇への懸念を口にするようであれば、相場の動向が一変する可能性があり、特に注意が必要。本邦では日銀金融政策決定会合が月末に開催されるが、米金利上昇、原油価格の反発、円安の進行により物価が上昇し易い環境が整っており、暫くは状況を静観するだろう。欧州では引き続きイタリアの金融機関救済への懸念が払拭されず、市場が懸念するECBによる実質的な量的緩和縮小(テーパリング)の開始は先送りとならざるを得ないのでは。3月以降にオランダ、フランスの大統領選挙が予定されており、特にフランスでは極右のルペン氏が第一次投票でトップになる可能性が高まっており、欧州の政治動向にも引き続き注意が必要。

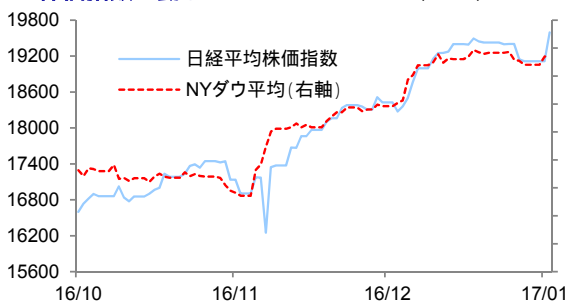
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	米ISM製造業景況指数	11月	52.5	53.2	51.9
12/6	米ISM非製造業景況指数	11月	55.5	57.2	54.8
12/2	米非農業部門雇用者数変化	11月	180K	178K	161K
12/2	米失業率	11月	4.9%	4.6%	4.9%
12/2	米平均時給(前月比)	11月	0.2%	-0.1%	0.4%
12/14	米FOMC FFターゲット		0.5-0.75	0.5-0.75	0.25-0.5
12/15	米小売売上高(前月比)	11月	0.3%	0.1%	0.8%
12/22	中古住宅販売件数	11月	5.50M	5.61M	5.60M
12/23	米耐久財受注(前月比)	11月	-4.8%	-4.6%	4.8%
12/27	日全国CPI(前年比)	11月	0.5%	0.5%	0.1%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ドル・ブル (5名、115.00～123.00、中心116.00～121.00)

高田	116.00 ～ 121.00	トランプ次期大統領の政策に対する期待感が高く、また米経済指標は良好であり、足許のドル高相場のトレンドを反転させるほどの材料は見当たらない。過熱気味の相場が調整する局面もあろうが一時的と考える。
佐藤	115.00 ～ 122.00	ドル堅調地合いが継続。足許の米経済指標は良好で、FRBの利上げスタンスを支持する内容。一方、市場の利上げ織り込みは進んでおらず、利上げ期待の高まりと共にドル/円は堅調な展開を予想する。
西島	116.00 ～ 121.00	年始の中国PMIや米ISM製造業を無難にクリア、昨年初のようなリスクオフ相場幕開けの可能性は後退。一服感をうかがわせていたトランプラリーが勢いを取り戻しながら、目先のドル/円は上値を追っていく展開に。
西谷	116.00 ～ 121.00	今のところドル高の悪影響が経済指標等に反映されておらず、トランプ次期米大統領の政策への期待を背景とした足許のトレンドが反転する材料は見当たらない。トランプ次期大統領からの直接的な牽制発言等がない限り、足許のドル堅調地合いが継続するものと思われる。
鶴田	115.00 ～ 123.00	12月のFOMCでは利上げが実施され、2017年の政策金利見通しも上方修正となった。米長期金利が上昇基調にある中、足許良好な経済指標が続いており、ドル/円は引き続き底堅い推移が続くと予想。但し、トランプ次期大統領によるドル高牽制発言による急激なドル売りの動きには注意したい。

■ ドル・ベア (6名、109.00～120.00、中心110.00～119.00)

藤崎	110.00 ～ 119.00	FRBは利上げを実施し、追加利上げも織り込み済み。トランプ次期政権への政策期待は根強いが、ドル高と金利上昇による米景気悪化懸念、トランプ次期大統領によるドル高牽制の可能性もあり、投機筋の円ショートのアনワインドに注意が必要。
山下	109.00 ～ 118.00	トランプ次期政権への期待による過度なドル高は、米企業収益を悪化させるに留まらず、体力のない新興国からの資金流出を招いており、新興国発のリスクオフ相場に立ち戻る可能性が高い。ドルの上値は限定的としかわざるをえない。
矢野	110.00 ～ 120.00	FOMCによる追加利上げ期待、トランプ次期政権への期待に伴うドル買いも一旦終了。米大統領選以降の上昇はオーバーシュートしていたこともあり、その調整色が強まるリスクは高いだろう。
下山	111.00 ～ 120.00	トランプ相場に一旦の終止符が打たれると予想。今はムードで保たれているだろう景況感も、ドル高の弊害が意識されれば崩れよう。また、財源等の面でもトランプ次期政権の政策実現能力にはやや懐疑的。20日の就任に向けて、一旦利益確定等が入るだろう。
森谷	110.00 ～ 119.00	トランプ次期政権の具体的な政策については依然として不透明な部分が多い状況であり、過熱感のあるドル買いはさすがに一服感が見られると予想。大統領選挙後積み上がってきたポジションの調整により、上値の重い推移となると予想する。
大熊	111.00 ～ 119.00	トランプ次期大統領による財政支出の大幅拡大に対する期待は残存しているものの、これまでの過熱感から一旦は調整が入りやすいと思われる。年末にかけて上昇していた米長期金利が失速していることもあり、ドル/円は上値重い推移を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0100 ~ 1.0900
EUR/JPY 114.00 ~ 126.00

国際為替部 為替営業第二チーム 下山 泰典

■ 先月の為替相場

先月のユーロ相場は下落した。
1日は、対ドルでは1.05台後半で、対円では121円台半ばでオープン。米長期金利の上昇が継続する中、欧州の金利上昇やECBの量的緩和縮小（テーパリング）を示唆する報道もあり、1.06台後半まで上昇。2日、発表された米11月雇用統計が強弱混交の内容に、結局1.06台後半で越週した。
5日は、週末のイタリア国民投票の出口調査で改正反対派が優勢と伝わり、レンツィ首相が敗北宣言を発表すると、一時1.05近辺まで急落。その後は、欧州主要国の金利上昇などを背景に1.08近辺まで急上昇。8日、注目されたECB理事会では政策金利が据え置きとなるも、月間の資産買い入れ額を縮小するとの発表に、この月の高値となる1.0875まで急上昇。しかし、資産買い入れの延長期間が事前予想を上回ったことや、必要に応じて増額や更なる延長もあり得ることが示されたことを受け、一転してユーロ売りが強まると1.06台割れまで反落した。9日には米長期金利の上昇も相俟ってドル買い優勢の展開となり、1.05台半ばで越週。

12日、伊紙が同国政府主導による銀行救済基金の可能性を報じユーロ買いが強まると、1.06台半ばまで急騰。さらに翌日にかけては、伊最大手銀行が経営再建策を発表したことや米長期金利の低下などを背景に1.06台後半まで上伸した。しかし、14日のFOMCでの利上げやドットチャートでの来年の政策金利見通しが引き上げられたことでドル買いが強まると1.05割れまで下落。加えて15日には、欧米金利差の拡大観測などから2003年1月以来の安値となる1.03台後半まで急落した。その後はショートカバーなどからやや値を戻し、1.04台半ばで越週。

19日、1.04台半ばでオープン。イエレンFRB議長のタカ派な発言や米金利が上昇する動きにドル買いの流れが強まり、20日にかけてこの月の安値となる1.0352まで下落した。21日には一時1.04台半ばまで反発するも、ロンドン仲値にかけてのドル買い需要や伊大手銀行の年内増資完了が失敗に終わる可能性が高まったとの報道に、上値を押さえられる。その後クリスマスを控える中で翌週初めで方向感の乏しい展開が継続する。

26日、1.04台半ばでオープン。26～27日とクリスマス休暇で主要マーケットが軒並み休場で、動意・方向感には乏しい展開。30日に特段材料がない中でストップロスオーダーを巻き込みつつ一時1.06台後半まで急騰する動きなどはあったが、全体的に流動性は乏しく1.05台前半で、対円では123円レベルで越月した。

■ 今月の見通し

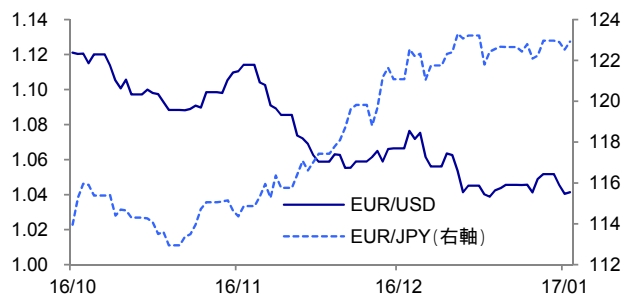
今月のユーロ相場は底堅い展開を予想する。
今月最大のイベントは、20日（金）のトランプ次期大統領の大統領就任だろう。これまで米株・米長期債利回り・ドルが大きく上昇してきたが、トランプ相場とも言われるように、同氏の積極財政政策などがポジティブに評価されたところが多い。20日の就任を受けたその期待感の変化がポイントだと考えているが、“Buy the rumor, Sell the fact”の格言にもあるように、投機筋がユーロや円などに対してこれまで傾けたドルロングポジションを一旦は手仕舞い、利益を確定する動きが出やすいと思われる。ドル売り主導でユーロは底堅い値動きを予想する。

しかし、ユーロを巡っては政局不安や金融不安が拡大するリスクを意識しておきたい。前者については、昨年のイタリア国民投票で当時の政権にノーが突き付けられたが、英国のEU離脱（Brexit）問題や米国でのトランプ次期大統領の選挙戦勝利なども合わせて、世界的に保護主義・反グローバル主義的な動きが蔓延してきている印象。今年は3月に“Brexit”の正式申請・オランダ総選挙、4月にはフランス大統領選挙、9月にはドイツの総選挙が予定されており、政治的な重要イベントが目白押し。特にユーロ圏の2大大国である独・仏で反EUの機運が高まれば、どうしてもEUや通貨ユーロの崩壊が意識されよう。また、イタリア大手銀行の財務懸念をはじめ、欧州各地で意識されている大手金融機関の財務リスクが未だに高い状況となっていることも無視できない。さらには、12月のECB理事会では、事前にテーパリングさえ意識されていたが、ドラギECB総裁からは「テーパリングは議論していない」、「（経済情勢の目算が狂えば）緩和の規模を拡大する」など、むしろ緩和に積極的なスタンスが示された。これらを考えれば、上記のポジション調整によるドル売り/ユーロ買いがある程度一服すれば、今度はユーロ売り主導でユーロ相場は上値が重くなると想定される。

今月という時間軸で考えれば、20日がトランプ次期大統領の大統領就任であり、終盤までユーロの買戻しが優勢になると考えているが、トランプ次期大統領への注目が一旦後退し、次のテーマを探す局面となれば、欧州の政局不安に注目が集まろう。そのため、下旬からは徐々にユーロの上値が重くなると考えている。無論、ユーロ圏での政局不安・金融機関の財務懸念が一段と強く意識されるような局面などにはユーロが急速に売られることも考えられるため注意は必要だが、基本的に今月のユーロ相場は底堅い値動きとなるだろう。

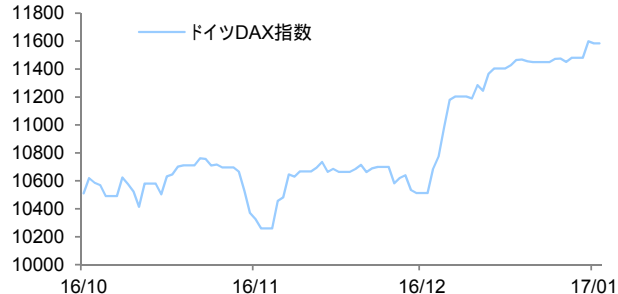
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/4	伊 国民投票	-	-	-	-
12/6	欧 GDP(前期比/前年比) 確報値	3Q	0.3%/1.6%	0.3%/1.7%	0.3%/1.6%
12/8	欧 ECB理事会	-	-	-	-
12/15	欧 製造業/サービス業PMI・速報値	12月	53.7/53.8	54.9/53.1	53.7/53.8
12/15	欧 コンポジットPMI・速報値	12月	53.9	53.9	53.9
12/16	欧 CPI(前月比/前年比)	11月	-0.1%/0.6%	-0.1%/0.6%	0.2%/0.5%
12/16	欧 CPIコア(前年比)	11月	0.8%	0.8%	0.8%
-	伊 大手銀行救済関連報道	-	-	-	-

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (1名、1.0100～1.0900、中心1.0100～1.0900)

下山	1.0100 ～ 1.0900	トランプ相場に一旦の終止符が打たれ、底堅く推移する展開を予想。20日の大統領就任に向けてユーロショートポジションに利益確定的な動きが入り、ユーロ相場を押し上げるだろう。しかし、今年ユーロ圏は政治リスクが顕在化する可能性に注意を要する。大きく上昇する相場も期待はできないと考えている。
----	-----------------------	---

■ ユーロ・ベア (10名、1.0000～1.0800、中心1.0100～1.0650)

藤崎	1.0100 ～ 1.0800	トランプ次期政権への財政出動期待、イタリアの金融機関救済に関する懸念も払拭されておらず、ユーロの上値が重い展開を予想。3月オランダ、4～5月に仏大統領選挙を控えており、ユーロ圏の政治リスクが強く意識される年が始まり、注意が必要。
山下	1.0000 ～ 1.0700	イタリア憲法改正を問う国民投票も否決され、今後行われる予定の欧州政治イベントの雲行きは怪しくなっており、リスクの高まりは景気停滞をも引き起こす可能性がある。ユーロを積極的に買い進める展開にはならないであろう。
矢野	1.0100 ～ 1.0600	イタリア金融機関救済など、引き続き不透明要因が多いことからユーロは上値を押しさえられよう。さらに、年央にかけてはフランス大統領選も控えており、積極的なユーロ買いは手控えられよう。
高田	1.0100 ～ 1.0600	ECBによる追加緩和観測が台頭する一方、米利上げ期待からユーロは上値重く推移するであろう。今年は春にフランス、秋にドイツ等、政治的イベントを控え、高まる先行きへの不透明感からユーロは積極的に買われ難いであろう。
佐藤	1.0100 ～ 1.0700	ドル堅調地合いが継続。足許の欧州経済指標は予想を上回るものが散見されるものの、12月ECB理事会で金融緩和が強化されたことで、欧米金融政策格差に焦点があたりやすく、ユーロは上値の重い展開を予想する。
西島	1.0100 ～ 1.0600	独CPIの好調などを背景に、一時的には欧州金利上昇、ユーロ高を促す場面は考えうる。ただし、想定外に長引くトランプ相場、ドル高に押されながら、ユーロは上値の重い相場展開が基本線とみる。
西谷	1.0100 ～ 1.0600	トランプ次期米大統領の政策期待を背景としたドル高地合いの継続に加え、欧州の政治リスク等、欧州発の懸念材料も意識される中、ユーロが大きく買い戻される展開は想定しにくい。テクニカル的にも下向きのバイアスが強まっており、一段とユーロ安が進む展開を予想している。
森谷	1.0100 ～ 1.0700	12月の憲法改正を問うイタリア国民投票が否決となったこともあり、ユーロ圏の政治リスクが強く意識されている。加えて、イタリア大手銀行を巡る問題についても不透明感が強い状況が続いており、ユーロ圏経済・政治リスクへの意識からユーロは積極的に買われづらい展開となると予想する。
鶴田	1.0100 ～ 1.0600	イタリア金融機関の救済問題や、今後の欧州圏における政治イベントなど先行き不透明感が漂う中、ECBは緩和姿勢を継続しており、ユーロ相場は上値の重い展開が続くと予想。また、良好な米経済指標などを背景にドルは堅調推移が続いており、こちらもユーロ相場の重荷となるだろう。
大熊	1.0100 ～ 1.0700	欧州の保護主義の台頭による政治リスクに、年末から頻発しているテロ事件等のリスク要因も重なり、ユーロを買い進める地合いではないと思われる。ECBが12月に金融緩和策の延長を決定したこともあり、軟調な推移となるだろう。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.1800 ~ 1.2600
GBP/JPY 135.00 ~ 149.90

欧州資金部 山本 泰平

■ 先月の為替相場

12月のポンドドルは1.25レベルでオープンし、小動き。ブレグジット懸念は根強く、引き続きリスク要因ではあるが、12月はOPEC/非OPECの減産合意で英資源銘柄の業績回復が期待される中、英国の長期外貨・現地通貨建て発行体デフォルト格付けが「AA」で据え置かれたこと等が安心要因となり、急激なポンド売りは手控えられた。

12月の序盤は、デービス英EU離脱相が単一市場への参加を維持するためにEU予算の拠出を許容することを示唆する中、英下院のロンドン西部リッチモンドパーク選挙区補欠選で英自民党の親EU派候補サラ・オルニー氏がEU懐疑派に大差をつけ当選すると、ソフト・ブレグジット期待が浮上し、ポンドドルは9月来の高値1.2775まで上昇した。その後、米FOMC(14日)を控え、米金利が上昇し、ドルがポンドに対し買い戻されると、1.2548まで小緩む。米メディア大手の英社買収観測(約146億ドルで買収)に絡むポンド買いが意識される中、ハモンド財務相がEU離脱後の暫定的な合意を模索し、暫定期間として2021年までEU予算を支払い続ける用意があると発言(12日)。英格付けの据え置きや、OPEC/非OPEC減産合意も相俟って、ポンドは上値を再び試す展開に。11月英CPIが前年比+1.2%上昇し、2年強ぶりの高水準となると、インフレ懸念から英10年物国債利回り、6月国民投票時以来の高水準に上昇し、ポンドドルは1.27台を回復。注目された米FOMC(13日～14日)ではFF金利の誘導目標が予想通り0.25%引き上げられ、同時に発表された政策金利見直しでは、2017年の利上げの予想回数が中央値で3回となり、9月時点での2回から利上げの予想ベースが加速。これを受け、ドルが買われ(ドル指数が約14年ぶりの水準まで上昇)、ポンドは軟調に転じた。15日の英中銀政策発表では、政策金利、資産購入額ともに据え置かれたが、声明文でポンド高を背景にインフレ上振れ懸念が低下したとの見解が示されると、市場ではハト派的と解釈され、一段安。英銀による米事業の買収や、英製薬会社の米社買収を背景にポンド売りフロー観測が浮上すると、1.22台まで下落。その後は、クリスマス・年末の影響で市場参加者が減少し、ブレグジットを巡る英政局も小休止となったため、相場変動も小幅となった。

■ 今月の見通し

1月最大の注目はリスボン条約50条発動に関する最高裁判決だが、どのような判決になってもEU離脱を巡る不透明感が払拭されることはないだろう。政府の計画通りに最高裁判決で首相権限が認められ、3月に50条を発動できたとしても、2017年は欧州各国の選挙が立て込んでおり、交渉はそれほど捗らないだろうし、判決が見送られ包括的新法の必要性から2017年3月のEU離脱手続き開始が遅延しても、公約不履行となったメイ首相の基盤が揺らぎ、政局不透明感が増すだけだ。

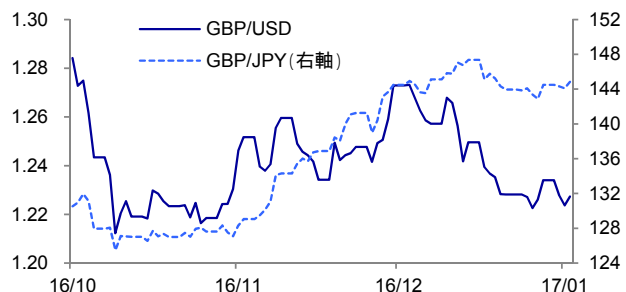
足許のポンド相場は、短期的な景気見通しを楽観視する向きから下げ渋っているが、2017年は英EU離脱手続きを巡る議論が再び注目されるため、逆転する恐れがある。10月に、英政府が単一市場への自由なアクセスよりも移民制限を優先させると示唆しただけで、ポンドと英国債が急落したことを思い起こせば、一段のポンド売りに備えるべきだろう。

金融政策を巡っては、英中銀国債買い入れプログラムが2月に期限を迎えることから、当局関係者の発言に神経質に反応する展開となるだろう。12月は、世界的なインフレ見通しの改善を背景に欧州中銀やスウェーデン中銀が買い入れの減額を発表しているが、英中銀も緩和縮小の動きに加わる可能性がある。「上下どちらの方向にもありえる」とのカーニー英中銀総裁の発言は、既に英中銀がハト派的姿勢から中立に移行したことを窺わせており、弊行は、英中銀が次回会合で資産購入の期限延長を見送り、英EU離脱の悪影響が顕在化するまでの間、バランスシート拡大をストップすることを想定している。

中国当局の人民元介入により、中国の外貨準備が減少していることもポンド相場の上値を重くする要因の一つだろう。中国当局は外準構成を明らかにしてはいないが、ポンドが相当のシェアを占めると想定されることから、中国が外準を縮小させればポンド売りフローに繋がる。米利上げを背景に新興国通貨安が意識される中、トランプ新大統領の対中政策も相俟って、人民元安圧力が強まり、中国当局が一段の介入に踏み切れば、ポンドの上値を抑える可能性がある。

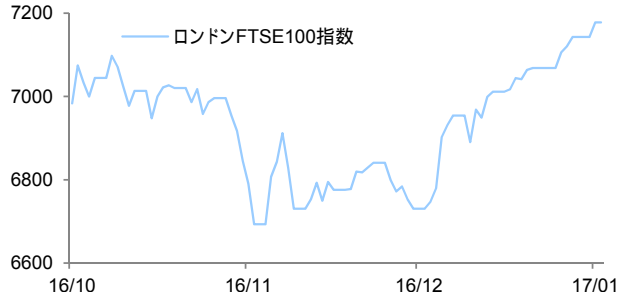
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	54.4%	53.4%	54.2%
12/2	建設業PMI	11月	52.2%	52.8%	54.3%
12/5	サービス業PMI	11月	54.0%	55.2%	52.6%
12/7	鉱工業生産(前年比)	10月	0.5%	-1.1%	0.4%
12/7	製造業生産(前年比)	10月	0.7%	-0.4%	0.2%
12/13	消費者物価指数(前年比)	11月	1.1%	1.2%	0.9%
12/14	ILO失業率	10月	4.8%	4.8%	4.8%
12/15	小売売上高(含自動車前年比)	11月	5.9%	5.9%	7.4%
12/23	GDP(前年比)	3Q	2.3%	2.2%	2.3%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7000 ~ 0.7450
AUD/JPY 82.00 ~ 87.00

シドニー支店 山口 美紀

■ 先月の為替相場

12月の豪ドルは下落。

1日、豪ドルは0.73台後半でスタート。豪7～9月期民間設備投資が予想比下振れするも、豪ドルへの影響は限定的だった。翌日、米11月雇用統計において11月非農業部門雇用者数の下振れや、前月分と前々月分が下方修正されたことから、ドル売りが進行し、豪ドルは0.74台半ばに上昇。翌週に入り、原油の上昇を受けて、商品通貨の豪ドルは0.74台後半に上伸した。6日、豪州準備銀行(RBA)理事会では予想通り政策金利が据え置かれ、豪ドルは同水準にて横ばい推移。翌日、豪7～9月期GDPが市場予想▲0.1%を大幅に下回る▲0.5%となり、豪ドルは0.74台前半に急落。その後数日、豪ドルは0.74台中心での揉み合いが続いた。

14日、FOMC前に豪ドルは12月高値となる0.7525を付けるも、FOMCメンバーによる政策金利見通し(ドットチャート)の上方修正を受けて、ドルが急騰し、豪ドルは0.74台前半に急落した。翌日、豪州政府の年次経済・財政見直し(MYEFO)の内容次第で格付け機関が豪州のトリプルA格付けを引き下げる可能性があるとの報道が伝わり、豪ドルは0.73台に下落。19日、注目のMYEFOでは、2016/17年度の予想赤字幅が縮小、2020/21年度までに財政黒字に転換すると発表され、各格付け機関は豪州格付けを据え置いた。しかし、同日の海外市場において、ロシアのトルコ大使が銃撃され、地政学リスクが高まり、リスク通貨の豪ドルは0.72台半ばに急落。

23日、クリスマス休暇を控えて市場参加者が少ない中、豪ドル売りが継続し、豪ドルは12月安値0.7160まで下落。その後、12月月末に向けて、豪ドルは0.71台後半から0.72台前半を揉み合い・推移した。結局、0.7199で越年した。

■ 今月の見通し

「25日の豪10～12月期消費者物価指数(CPI)に注目。」

先月、FOMCが1年ぶりの利上げを決めた。利上げは規定路線だったが、景気判断を前進させ、政策金利見通し(ドットチャート)も上方修正した。特に、利上げの回数は2017年:2回から3回(17人中11人ものメンバーが2017年に3回以上の利上げを予測)、また、長期見通し:2.875%→3.00%に上方修正。トランプ次期大統領就任前で政策運営も明らかになっていない現状では予測変更無しとの見方が主流だったため、ビッグサプライズとなった。金利先高観の高まりに伴うドル高が一段と進行し、ドルインデックスは14年ぶりの水準にまで上伸している。引き続き、次期政権の政策が明らかになる今月以降のFRBや市場参加者の政策金利見通しの変化が注目される。ただし、本年1月20日がトランプ大統領就任式、更に就任後100日間はハネムーン期間と呼ばれており、2017年初めは昨年より続いているトランプ相場(米株高・米長期債利回り上昇・米ドル高)継続と見る。

一方、豪州では、先月MYEFOの発表が話題になった。2016/17年度の財政赤字は365億豪ドル、歳出削減と増税を通じ、2020/21年度までに財政黒字に転換すると見通しを示し、一旦は各格付け機関は豪州のトリプルA格付けを据え置いた。しかし、大手格付け会社は「政府が2021年度までに財政赤字を解消し、財政均衡を達成できるかどうかについて引き続き悲観的だ」とし、見通しは「ネガティブ」のまま。引き続き、格下げリスクが燃っており、今年5月の予算案に注目が集まる。短期的には、25日発表の豪10～12月期CPIに注目だ。RBAはインフレターゲットを+2～3%としているが、11月のRBA四半期金融政策報告書にて2018年までのインフレ見通しを+1.5～2.5%としている。CPIが+1.5%を下回るかどうか、利下げ可否の判断材料となろう。

米金利先高感の継続、豪州利下げ観測の燃りを背景に、米国と豪州の金融政策の方向性の違いから、豪ドルは軟調推移継続と見る。また、テクニカル的にも、200日の長期移動平均線(0.75台前半)や日足の一目均衡表の雲(0.74台半ば～0.75台半ば)が重石となろう。

今月の注目経済指標は、貿易収支(6日)、小売売上高(10日)、雇用統計(19日)、CPI(25日)、PPI(27日)。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

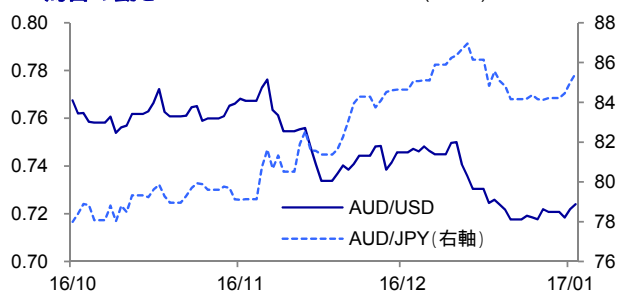
『当地のお正月事情』

お正月に留まらず、今回はクリスマスからお正月までを紹介。まず、クリスマス休暇は1年間で最大のホリデーシーズン、学校は12月中旬に学年末を迎え、長い長い夏休みに突入します。スクールホリデーは約10週間続くので、多くの家庭がこの時期に旅行の計画を立てます。

クリスマスの買い物や料理が終わり、全ての準備が整った24日のクリスマスは、教会に出掛けてお祈りをし、自宅や親戚の家で、のんびりと過ごす人が多いようです。そして25日のクリスマスは、待ちに待ったプレゼントを開ける日です。オーストラリアでは、両親、親戚、友達からのプレゼントが12月の初め頃から次々と送られてきて、クリスマスツリーの下に置かれます。しかし、プレゼントはクリスマスの朝まで、開けることはできません。子供達にとっては拷問です。翌日26日は祝日で「ボクシングデー」。教会が貧しい人たちのために寄付を募ったクリスマスプレゼントの箱(box)を開ける日だったことから「BoxingDay」と呼ばれるそうです。この日の最大の楽しみは大バーゲン！。クリスマス前には、家族や友人の贈り物の品々を買い、クリスマスが終わったら、自分用のプレゼントを安くゲットします。12月31日、大晦日は祝日ではなく、平日です。勤務時間を短縮したり、お休みになる会社もありますが、金融機関は通常営業です。しかし、夜のカウントダウンはやはり特別です。特にシドニーでは、夕方近くになると盛大に行われるカウントダウン花火に合わせてハーバーブリッジやオペラハウス周辺に人が多く集まり始め、街中がお祭りムードに包まれます。日付が変わり、1月1日。元旦は祝日でお店やレストランも大半は休業です。クリスマスや大晦日に大忙しだった疲れをゆっくりと癒します。今年は2日も振替休日だったため、ゆっくり休めました。本年も皆様のご期待に添えるよう一層のサービス向上を目指し駆け抜けていきたいと思います。本年もよろしくお願い致します。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	民間設備投資	7-9月	▲3.0%	▲4.0%	▲5.2%
12/2	小売売上高	10月	0.3%	0.5%	0.6%
12/6	経常収支	7-9月	▲13.5Bio	▲11.4Bio	▲15.9Bio
12/6	RBAキャッシュレート		1.50%	1.50%	1.50%
12/7	GDP[前期比]	7-9月	▲0.1%	▲0.5%	0.6%
12/7	GDP[前年比]	7-9月	2.2%	1.8%	3.1%
12/15	雇用者数	11月	17.5千人	39.1千人	15.2千人
12/15	失業率	11月	5.6%	5.7%	5.6%
12/19	年次経済財政見直し				

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3280 ~ 1.3680
CAD/JPY 82.00 ~ 89.60

米州資金部 光野 由貴宏

■ 先月の為替相場

月初のドル/カナダドルは、1.3427でオープン。WTI原油が50ドル/バレル台で底堅く推移する中、カナダ11月製造業PMIが前回から改善したことや、カナダ11月雇用統計で、失業率が6.8%まで低下し、雇用ネット変化率も予想を上回ったことから1.3300を割り込み、1.3254まで下落。7日のカナダ中銀理事会では、金融政策の据え置きが発表され、一部で利下げを期待していた市場参加者によるカナダドルの買い戻しに、ドル/カナダドルは1.3210まで下落。8日のECB理事会では、注目されていた資産購入プログラムは600億ユーロの規模で9か月の延長と、市場予想は800億ユーロで6か月の延長で、毎月の購入金額が減額されたことがテーパリングと受け止められ、ユーロ買い・カナダドル売りが強まったことから、ドル/カナダドルも一旦1.3251まで上昇した。しかし、合計の資産購入金額が予想以上であったことから更なる追加緩和と評価され、ユーロ売り・カナダドル買いが強まったことから対ドルでもカナダドルが買われ、ドル/カナダドルは1.3184まで反落。月中のドル/カナダドルは、週末のOPEC加盟国・非加盟国の会合で減産合意に達したことや、サウジ石油相が今現在公約しているよりも更なる減産を望んでいると発言したこともあり、原油相場の上昇を受け、ドル/カナダドルは1.3102まで下落。その後もFOMC会合を控えたドル売りとなったことから、ドル/カナダドルは月安値の1.3081まで下落。しかし14日に行われたFOMC会合では来年の金利見通しが9月時の2回の利上げから3回に引き上げられたことがサプライズとなり、市場では一気にドル買いが強まり1.3324まで上昇。その後もカナダ10月製造業売上高がマイナスの伸びとなったこともあり、ドル/カナダドルは1.3417まで上昇。「中国が南シナ海で米輸送船を捕まえた」とのヘッドラインを受け、ドル売りが強まり、1.3325まで下落する局面もあったが、中国が捕らえたのは輸送船ではなく、米海軍の無人の潜水艇であったことから1.3334まで値を戻した。月末のカナダドルは、FOMC後のドル買いが継続し、月初高値の1.3430付近を上抜けると1.35台まで上昇。クリスマス休暇モードに入り、他通貨の値動きは限定となる中、23日に発表されたカナダ10月GDPが予想を大きく下回ると月高値の1.3569まで上昇。年末を目前にその後はポジション調整の範囲内となり、1.35台前半での推移が続いた。

■ 今月の見通し

来月のドル/カナダドルは堅調な推移を予想。トランプ次期大統領の就任式が1月20日に行われるが、その後の政治改革はドル買い、カナダドル売りとなる要素が多々含まれている。貿易政策において、トランプ氏は選挙期間に他国からの輸入規制を強化すると発言し、特段標的になったのが北米自由貿易協定(NATFA)であった。NAFTAでは主にメキシコが規制強化先と発言していたが、この協定にはカナダも含まれており、貿易の大半を米国としているカナダにとって国境関税は経済に大きなマイナス。もしトランプ就任後NATFA見直しでカナダに対して増税となれば、カナダドル売りが強まると予想。また財政出動期待を受けて米長期金利上昇に伴うドル買いの流れが続くと予想。12月のFOMC会合で2017年の利上げ見通しが2回から3回に上方修正されたことや、カナダ中銀の利下げ観測も高まる中、引き続き米国・カナダの2か国間の金利差の拡大がドル買い・カナダドル売りにつながると予想。WTI原油は50ドル/バレル台前半で底堅く推移しているが、OPEC・非加盟国での大幅な減産が期待が既に織り込まれており、これから先更なる減産合意がされない限り原油価格の大幅な上昇は限定的と予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

カナダの年末年始は、クリスマスと異なり「家族と過ごす」という制約のない比較的自由な行事です。多くのカナダ人は大晦日を友人や親戚が主催するパーティーに料理を持ち寄るなどして、大勢で年越しを祝います。

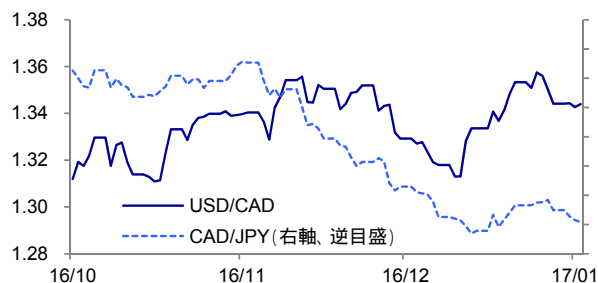
日本のように紅白見て、年越しそばを食べて除夜の鐘を聞き、初詣に出かけるという全国的にパターン化された習慣はこちらにはあまりないのですが、参加するパーティーによっては、カウントダウン間近にその一年を表す詩の朗読を行ったり、ダンスしたり、「蛍の光」を色んな言語で歌ったりと独自の特色を持っていたりします。

ただ、どのパーティーに行っても共通するのは、真夜中12時のハグとキスの嵐です。いつもはハグしかしない友人や親戚ともこの時ばかりはヨーロッパのようににほっぺにキスしたりして、お互い新年を祝います。大きなパーティーでは、そこで初めて出会った人達でもその場の雰囲気ですぐにハグすること。

カナダでも元旦は休日ですが、特に何をするでもなく、多くの場合は前日の夜更かしとパーティーの疲れを癒すため自宅でゆっくりと過ごします。なかにはニューイヤープランチを食べに行くことが習慣となっている人達もいると聞きますが、その人達は前日のパーティーでハッスルし過ぎなかった賢い人達なのでしょう。(カナダ支店 那須 紘子)

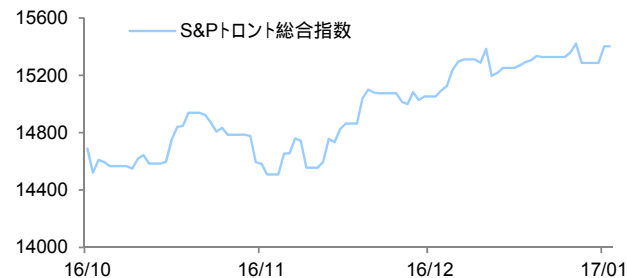
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	RBCカナダ製造業PMI	11月		51.5	51.1
12/1	失業率	11月	7%	6.8%	7%
12/1	雇用ネット変化率	11月	-15.0k	10.7k	43.9k
12/7	カナダ銀行翌日物貸出金利		0.50%	0.50%	0.50%
12/8	住宅着工件数	11月	191.0k	184.0k	192.3kr
12/22	CPI季調前(前月比)	11月	-0.2%	-0.4%	0.2%
12/22	消費者物価指数(前年比)	11月	1.4%	1.2%	1.5%
12/22	小売売上高(前月比)	10月	0.7%	1.4%	0.3%r
12/23	GDP(前月比)	10月	0.0%	-0.3%	0.4%r

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1170 ~ 1225
 KRW/JPY 9.52 ~ 10.05
 JPY/KRW 9.95 ~ 10.50

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 山口 智裕

■ 先月の為替相場

12月のドル/ウォンは3か月連続で上昇。

14日のFOMC前までのドル/ウォンは方向感に乏しい展開。前月末の海外市場で、トランプ次期大統領が財務長官に指名したムニューチン氏がドル高に対して静観姿勢を示したことや、OPEC総会での原油減産の合意を受けて、1日のドル/ウォンは前月末比+7.9ウォン安の1177.0で取引を開始後、米雇用統計やイタリアでの憲法改正を問う国民投票などを控えて上げ幅を縮小。韓国時間の5日朝方発表された国民投票の結果は、大方の予想通り反対派が勝利する見通しとなった。しかしながら、海外市場では目立った影響が見られなかったことや、米11月ISM非製造業指数が市場予想を上回ったことを受けて、ダウ平均が史上最高値を更新。その後のドル/ウォンは上値重く推移。8日にはECB理事会での拡大資産購入プログラム(APP)の期間延長などへの期待感から、月安値となる前月末比▲12.6ウォン高の1156.5まで下落した。ECB理事会ではAPPの期限を9か月延長する一方、資産買入れペースの月額800億ユーロから600億ユーロへの減額を併せて発表。同発表を受けて、9日以降のドル/ウォンはECB理事会前の水準まで値を戻したものの、OPEC非加盟国の減産合意を受けてリスクセンチメントが改善する中、14日までは上値重く推移した。

FOMC以降のドル/ウォンは上昇。韓国時間の15日朝方、FRBは市場予想通り政策金利を+25bp引き上げ、0.50%～0.75%することを全会一致で決定した。しかし、メンバーの政策金利見通し(ドットチャート)で2017年末の中央値が1.25%～1.50%に上昇したことや、イエレン議長が「“高圧経済”を好むとは言っていない」など事前予想よりタカ派的な発言をしたことで、ドルが大幅上昇。15日のドル/ウォンは11月の高値に接近する1180台まで上昇した。その後、米金利の上昇が一服したことを受けて幅広い通貨に対してドル高が一服したものの、ドル/ウォンは薄商いとなる中、国内投資家の大口海外投資と思われるフローを受けて、上げ幅を拡大。最終営業日に月高値となる1211.5まで上昇。そのまま高値圏の前月末比+38.6ウォン安の1207.7で引けた。

■ 今月の見通し

1月のドル/ウォンは、底堅い展開を予想する。

米国のトランプ大統領の就任に際し、発表される政策内容には引き続き注意が必要となる。インフラ投資などが再度意識され、期待インフレの高まりから米金利が一段と上昇する場合や、対中政策を受けて人民元が下落する場合、ドル/ウォンは連れ高となる可能性がある。

ただし、株価が堅調に推移する中で海外投資家による韓国からの資金流出は相当程度落ち着いている。一方、12月の後半に韓国ウォンが他アジア通貨対比アンダーパフォームした要因は国内投資家の対外投資フローだといわれており、この動きは1月には一服する可能性がある。

国政動向に関しては、12月9日の韓国オンショア市場引け後、朴クネ大統領の弾劾案が賛成234票で採決された。これにより大統領権限が弾劾裁判まで即時停止され、現ファンギョンアン首相が権限を代行することとなった。弾劾裁判に関しては、弾劾事由を圧縮するなど、迅速に決定を行うべく準備が進んでおり、現在は3～4月中に判決が出る(=5～6月に大統領選挙)となる見方が有力となってきている。第1回目の弁論は1月3日に行われたが、朴クネ大統領が出席せず、9分で閉廷した。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

旧年中は大変お世話になりました。本年もよろしく願いいたします。

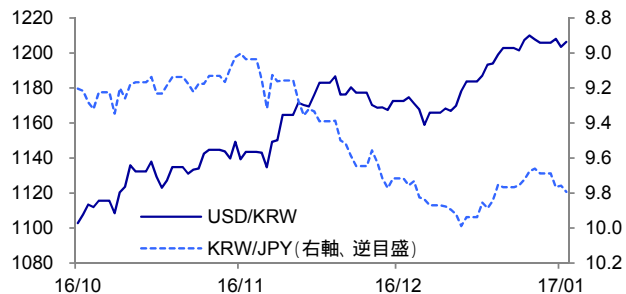
他のアジアと同様、正月には特段の思い入れもなく、旧正月(ソルラル)がメインです。特に今回の年末年始は31日、1日が土日でかつ振替もないため、ただの週末と同じでした。また、12月末にはまだクリスマスツリーが飾っており、正月からやっとな旧正月の準備が始まるといった感じで、年末は特に実感がありません。

旧正月はチュンク同様、基本的に家族と過ごすので、帰省ラッシュがあります。また、茶礼(チャレ/先祖を供養する儀式)のための食材の準備や、家族やお世話になった人などに贈り物をする習慣があるようで、準備が相当大変なようです。

ソルラルの朝には先祖を敬う儀式「茶礼」を執り行ないます。茶礼では、テーブルの上に位牌を置き、茶礼用の食べ物を順序通りに並べ、酒を注いでお辞儀をする儀式が行われます。茶礼が終わると韓国の雑煮「トック」を家族全員で食べます。数え年で年齢を数える韓国では、このトックを食べることによって1歳年を取るそうです。これが終わったら今度は「歳拝(セペ)」を行います。年少者がお辞儀をすると、年長者から徳談(トクダム)と呼ばれる幸せを祈る言葉とともに、セペトン(お年玉)が渡されます。

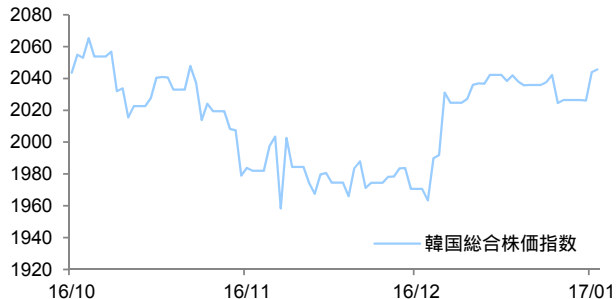
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	貿易収支	11月	\$8595m	\$8003m	\$7161m
12/2	GDP(前年比)	3Q F	2.70%	2.60%	2.70%
12/2	GDP(季調済/前期比)	3Q F	0.70%	0.60%	0.70%
12/14	失業率(季調済)	11月	3.70%	3.60%	3.70%
12/15	韓国銀行7日間貸付レート		1.25%	1.25%	1.25%
12/21	輸入 20日間 前年比	12月	--	9.40%	-3.10%
12/21	輸出 20日間 前年比	12月	--	11.60%	-0.20%
12/27	消費者信頼感	12月	--	94.2	95.8
12/29	鉱工業生産(前年比)	11月	1.50%	4.80%	-1.60%
12/30	消費者物価指数(前年比)	12月	1.30%	1.30%	1.30%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 31.50 ~ 33.00
TWD/JPY 3.34 ~ 3.77

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

12月のドル/台湾ドル相場は、ドル高台湾ドル安。

月初、31.969でオープンしたドル/台湾ドルは、2日に米11月雇用統計、4日に憲法改正を巡る伊国民投票を控え、台湾の株式市場で外国人投資家の売り越しが膨らんだことを背景に、台湾ドル売り優勢の展開。その後、伊国民投票で事前の世論調査通り、反対派勝利との報道を受け、いったんはドル買い台湾ドル売りで反応するも、その後はドルが反落し、台湾ドル高基調で推移。台湾の株式市場が年初来高値水準で堅調に推移する中、外国人投資家の買いが戻ってきたことにもサポートされ、一時、ドル/台湾ドルは31.700を割る場面も見られた。その後、8日に開催されたECB理事会において、2017年4月からの資産購入額が月間800億ユーロから600億ユーロに減額されたことを受けて、ユーロ圏においてもテーパリングが視野に入ったとの見方が広がる中、独金利上昇とともに米金利が上昇すると、再びドル買い優勢となり、ドル/台湾ドルは31.887まで反発。

月半ばに入ると、13日から14日にかけて開催されるFOMCを控えて様子見姿勢が強まり、31台後半でのみ合いが続く展開。FOMCでは、市場予想通りにFF金利の誘導目標が25bp引き上げられる一方、9月時点の見通しが維持されると見込まれていた2017年の利上げ見通しが年2回から3回に上方修正される結果。これを受け、米金利が大きく上昇する中、ドル/台湾ドルも32.050まで上昇。

下旬に入ると、台湾の株式市場ではクリスマス、年末休暇を控えて外国人投資家が売りに転じ、軟調に推移。ドル/台湾ドルも台湾ドル売り優勢の展開となり、23日にかけては、2016年7月以来の水準となる32.172まで台湾ドル安が進行。なお、22日に開催された台湾中央銀行の金融政策決定会合では、政策金利を1.375%に据え置くことを決定。市場予想通りの結果であり、相場への影響は限定的であった。

■ 今月の見通し

1月のドル/台湾ドル相場は、ドル高・台湾ドル安の継続を見込む。

12月に発表された台湾の経済指標を見ると、貿易収支が42.7億ドルと市場予想を上回る結果となった。主な要因は、IT部品の供給増加等を背景に、前年比+12.10%増となった輸出の伸び。この好調な輸出を背景に、12月の台湾中央銀行の金融政策決定会合後に発表された声明では、来年の台湾経済は改善すると表明され、年前半に落ち込んでいた台湾経済の着実な回復が伺える結果となった。しかしながら、足元の輸出増加については、年末の一時的な需要に支えられた結果と見る向きもあり、台湾経済について楽観視できない状況が続いている。10～12月期GDPをはじめ、1月に発表される経済指標で、経済の回復継続が確認できるかが注目される。

1月のドル/台湾ドル相場の最大の注目材料は、米国の政治経済動向。トランプ次期大統領の正式就任を控え、市場の期待通りに景気刺激策が実行され、実体経済に効果を及ぼすことができるか注目される。一方、足元で急速に進んできたドル高が、米国の輸出企業へ悪影響を与えることを踏まえると、ドル高に対する牽制発言が出てくるとも十分に懸念される状況であり、口先介入を受けたドル反落リスクには注意が必要か。

台湾側の材料としては、株式市場での外国人投資家の動向が注目される。台湾加権指数は、12月上旬までは年初来高値を更新する堅調な推移となっていたものの、その後は利益確定売りや、クリスマス、年末休暇を控えたポジション調整から外国人投資家の売り越しが大きく膨らみ(12月第4週目のみで232億台湾ドル)、ドル/台湾ドル上昇の要因となった。こうした状況下、年始以降、再び外国人投資家の買いが株式市場に戻ってくるか注目される。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

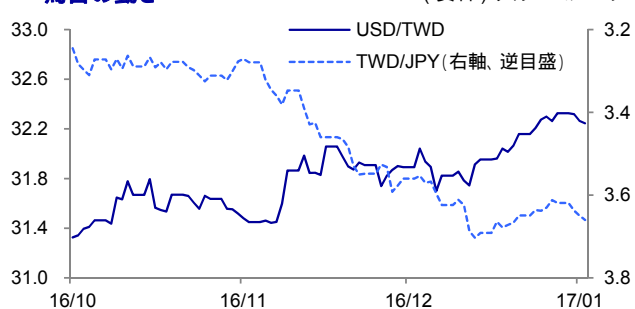
台湾のお正月といえば、年始というより旧正月(2017年は1月27日の除日から6連休となります)であり、年末年始が特別な日という意識は日本ほど高くないようですが、毎年恒例となっている台北101の花火や、人気歌手によるカウントダウンコンサートといった新年を祝うイベントは数多く開催されております。その中でも、台北資金室の台湾人スタッフのおすすめは次の2つとなっております。

1つ目は台東の初日の出。これは近年、若者に人気があるとのこと。台東はその名の通り、台湾の東部に位置する都市で、景色がきれいなことで人気の観光地となっております。初日の出を台湾内でもっとも早く見ることができる都市の1つであり、元旦は多くの人でにぎわうようです。ただ、難点は天候です。過去には天候が悪く、10年以上続けて元旦の御来光を見ることができなかったこともあったようです。

2つ目は総統府での国旗掲揚式典。こちらは新年とともに、開国記念日を祝う式典となっており、総統も参加します。国軍のパフォーマンスの後、国歌斉唱、日の出時間に合わせての国旗掲揚という流れで式典は行われるようです。なお、会場では、2009年ごろから国旗のデザインが入ったマフラーが配布されておりますが、これが大変な人気を集め、数量限定のため、熾烈な争奪戦が繰り広げられるとのことでした。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/6	CPI(前年比)	11月	1.50%	1.97%	1.70%
12/7	輸入(前年比)	11月	6.00%	3.00%	19.50%
12/7	輸出(前年比)	11月	9.30%	12.10%	9.40%
12/7	貿易収支	11月	3.08B	4.27B	4.38B
12/20	輸出受注(前年比)	11月	5.00%	7.00%	0.30%
12/22	失業率	11月	3.90%	3.84%	3.90%
12/22	政策金利	4Q	1.375%	1.375%	1.375%
12/23	鉱工業生産(前年比)	11月	5.00%	8.83%	3.70%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7550 ~ 7.7800
HKD/JPY 14.80 ~ 15.34

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【12月の香港ドル直物相場】

FRBの利上げ実施及び来年の利上げ見通しの上方修正等を受けたドル高の加速に伴い、米ドル／香港ドルは7.76を超えて上昇。一時、6か月ぶりの7.76台後半まで香港ドル安が進行する局面も見られた。トランプ次期大統領就任後の財政拡大は、FRBの利上げペースを更に加速させる可能性もある。加えて、人民元安の進行やトランプ氏の中国に対する非友好的な姿勢による米中関係の悪化リスクも、香港からの資本流出圧力を高めている。中国国内に目を向けてみると、引き続き中国当局は対外直接投資による資本流出を引き締めており、斯かる規制強化は香港市場への資金流入の減少につながっている。資本流出圧力の高まりから先安感も相俟って、米ドル／香港ドルフォワード1年物は6月以来のプラス水準に達しており、足許100ポイントを超える水準まで急騰している。

【12月の香港ドル金利市場】

タカ派的な内容となったFOMCから、米ドル金利の上昇に連動し香港ドル金利も上昇。指標金利である香港ドルHIBOR3か月物は、前月末から約30bp上昇し1%水準まで上昇。香港ドルHIBORと米ドルLIBORの3か月物の金利差は、前月末の▲24bp程度から大幅に縮小し、足許は香港ドルHIBORが米ドルLIBORの水準を上回っている状況。香港ドル金利スワップの3年物も、前月末から約60bp上昇し2%水準まで急騰しており、米ドルスワップ金利水準を上回っている。米ドルとのペッグ制の下でこのような動きとなったのは、米中関係の悪化や資本流出圧力の高まり等のリスク要因が、香港ドル金利の上昇ペースを早めた為であろう。一方、短期ゾーンについては、香港ドルHIBORオーバーナイト物は0.1%近辺で安定して推移しており、インターバンク市場における流動性を図る指標である香港金融管理局(HKMA)の当座預金残高は2,600億香港ドルと、引き続き潤沢な状況が継続。

【12月の香港株式市場】

ハンセン指数は22,000を下回る水準まで下落。不動産セクターは香港ドル金利の急騰、中国金融関連セクターはレバレッジ取引の解消が進行する中で、下押しされる展開となった。米国株式は直近高値を更新する一方で、中国上海総合指数の下落や中国当局の資本流出圧力に対する引き締めから、ハンセン指数は下落。人民元安進行に伴う香港ドルベースでの企業業績の悪化も、株価の押し下げに寄与したと考えられる。

■ 今月の見通し

【1月の香港ドル直物相場】

米ドル／香港ドルの取引レンジは、7.755から7.780を想定。トランプ政権が「一つの中国」政策を対中交渉の材料にする等の動きとなれば、更なる香港ドル安が進行するだろう。トランプ次期大統領が就任した後も、中国に対する姿勢が変わらなければ、米中関係の悪化は激しさを増す場合も想定される。加えて、FRBのタカ派的なスタンスやトランプ氏政策の一つでもある法人税減税等が実現することとなれば、アジア諸国からの資金流出圧力は更に高まるだろう。斯かる状況下、中国本土からの資本流出に対する抑制策から香港への資金流入は減少しつつあり、また来年3月に開催される香港の行政長官選挙に関する不確実性も短期的には香港ドルの下落要因となろう。トランプ政権の中国に対する動向に左右されるが、7.80水準までの一旦の下落も視野に入れておきたい。

【1月の香港ドル金利市場】

FRBの来年利上げ見通しの上方修正等から米ドル金利が上昇した動きに追随し、香港ドル金利も今後上昇していくと見込む。トランプ氏の中国に対する非友好的な姿勢の影響から、中国経済の減速や人民元安の進行等により資本流出圧力が更に高まる可能性も想定され、香港ドル金利と米ドル金利の金利差は拡大していくだろう。一方、短期ゾーンについては、潤沢な流動性環境が継続すると予想し、安定的に推移すると見込む。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

2017年も残りわずかとなりましたが、香港のお正月がどのようなものか皆さんご存知でしょうか？

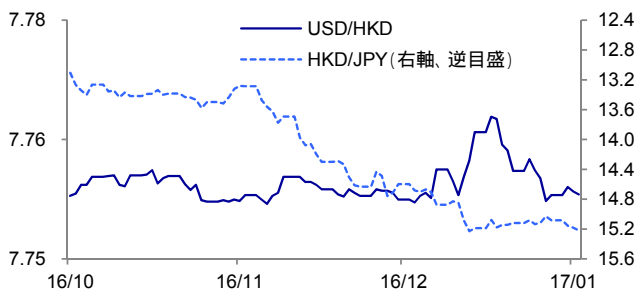
香港のカウントダウンイベントの規模は世界屈指で、国際ニュース等にもしばしば取り上げられます。香港島と九龍半島の会場から打ち上がる花火を、港や遊覧船、屋形船から見たりしますが、音楽に合わせて色とりどりの花火が打ち上げられ、それらが海面や立ち並ぶ高層ビルに反射し、幻想的な空間を演出します。更に、最近ではLEDライトを使ったダイナミックな演出もあり、夜空を鮮やかに彩ります。

また、香港の観光スポットで有名な蘭桂坊(ランカイフォン)や、旺角(モンコック)等のショッピングモール街は、大勢の人が一同に押し寄せ、活気ある熱い賑わいを見せます。

お正月のご予定をまだ決めかねていらっしゃる方は、是非香港のカウントダウンイベントへ！

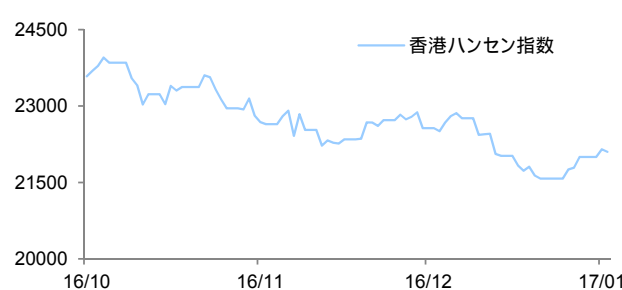
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	小売売上高(価額、前年比)	10月	-5.2%	-2.90%	-4.00%
12/1	小売売上高(数量、前年比)	10月	-4.7%	-2.70%	-3.80%
12/5	日経香港PMI	11月	--	49.5	48.2
12/7	外貨準備高	11月	--	385.0b	383.1b
12/13	鉱工業生産(前年比)	3Q	--	-0.10%	-0.40%
12/13	PPI(前年比)	3Q	--	3.90%	0.40%
12/19	失業率(季調済)	11月	3.4	3.3	3.40%
12/20	CPI(前年比)	11月	1.20%	1.20%	1.20%
12/20	総合国際収支	3Q	--	-1.95b	-16.09b
12/20	国際収支:経常収支	3Q	--	45.56b	14.83b

(資料) ブルームバーク

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.9000	~	7.2000
	CNY/JPY	15.42	~	17.54
	100JPY/CNY	5.8000	~	6.4900

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 上城戸 千尋

■ 先月の為替相場

【為替相場】

12月のドル/人民元相場は先月からのドル高人民元安基調の中、FOMC後一段とドル高が強まり、一時6.96を超えるドル高人民元安水準をつけた。月初、ドル/人民元実勢相場は6.89台半ばでオープン。4日に実施されたイタリアの憲法改正の是非を問う国民投票で改正が否決されると、直後はユーロが下落。しかしすぐに反発しドル下落へ転じると、ドル/人民元も6.86台前半まで人民元高方向へ推移。その後、8日に実施されたECB理事会で緩和延長が決定されるとユーロが再び下落、ドルが上昇したことに伴いドル/人民元は6.90を超える人民元安水準で推移した。14日、米FOMCにて政策金利の25bp利上げが決定された。利上げについては事前にマーケットに十分織り込まれていたものの、同時に公表されたFOMCメンバーの政策金利見通しについて、25bpの利上げを1回とすると、2017年の利上げ回数の見込みが前回9月の2回から3回に引き上げられた。トランプ次期政権の経済政策とその実現性が現時点では不透明なため、金利見通しはほぼ横ばいとの見方が大勢であったことから、公表内容を受けドルが上昇。翌15日の人民銀行(PBoC)仲値は前日対比261piptsドル高人民元安の6.9289に設定された。その後もドル高優勢で、16日に人民元の実勢相場は一時6.9616と2008年5月以来の安値をつける。その後はクリスマス休暇や年末を前に動意に乏しい展開となり6.95付近での推移となった。

【金利相場】

年末や春節越えの資金調達ニーズの強まりから流動性がタイトな状況が続き、SHIBORも上昇した。公開市場操作が連日ネットで資金吸収となる場面があったものの、オーバーナイトや1週間物など、年末を越えない短期のターム資金については資金放出が優勢でSHIBORを下回る水準での出合いも多く見られた。一方で年末や春節越えの資金調達ニーズは強い状態が継続。月央には人民元債券市場において、ファンド勢からレバレッジ解消のためのパニック的な売却の動きも散見される等、債券利回りが高騰。市場のセンチメント悪化が資金市場にも波及し金利上昇に拍車をかける場面も見られた。なお、14~16日に実施された中央経済工作会议において、金融政策スタンスが「慎重な金融政策」から「慎重かつ中立的な金融政策」に変更され、人民銀行の金融政策スタンスが引き締め方向に移っていることが確認された。

■ 今月の見通し

【為替相場】

1月のドル/人民元相場は足許のドル高基調が継続し、ドル/人民元も現在の水準から人民元安での推移を予想する。1月はいよいよトランプ氏が大統領に就任するが、事前の発言通り、就任初日に7つの措置を実行すると見られている。そのうちの1つが中国を為替操作国に認定することであり、もし実際に認定されれば人民元高要因となりうる。一方で、ドル/人民元は12月に一時6.96を超える水準まで人民元安が進行、資本流出の懸念も高まっている。当局は資本流出を抑えるため、規制強化を行い、ドル高人民元安に対する為替介入を行っているものと見られる。しかし現在の水準まで人民元安が進んでいることに鑑みると、資本流出が相応の規模で起こっており、更に人民元安に進むと見ている市場参加者が多いという可能性もある。足許のドル高の流れを大きく変える程の材料が見当たらないこともあり、ドル人民元は先月に引き続きドル高人民元安方向へ推移すると見られる。

【金利市場】

先月から春節越えの資金調達ニーズが強まっており、その傾向は今月も続くと思われることから、流動性がタイトな状況が継続すると見られる。また、債券市場での金利上昇により市場のセンチメントは悪化しており、引き続きSHIBORは上昇圧力がかかりやすい展開になると見られる。

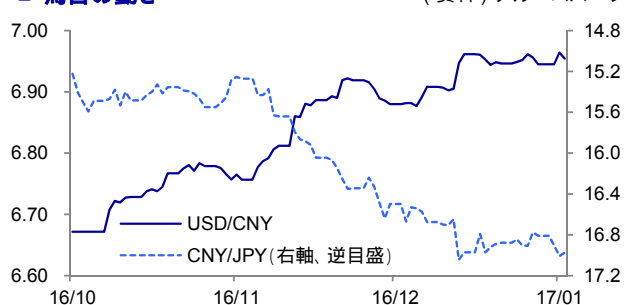
■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

中国のお正月と言えば旧正月(春節)です。今年は1/28が旧正月で、それに伴う休暇が1/27~2/2となっています。旧正月は皆、故郷に帰っていくので、上海から人がいなくなります。旧正月の過ごし方は1~4日目は親戚への挨拶回りをしたりして過ごしますが、5日目はお金の神様「財神」がやってくる日とされており、この日は街中で爆竹が鳴り響きます。しかし、以前ニュースにもなりましたが、大気汚染が深刻な中国ではこの爆竹も汚染の要因になるとされ、全国的に制限する動きが出ています。お正月といえばお年玉ですが、中国にもあります。一人っ子政策の影響で各家庭の子供の数が少ないので、一人当たりのお年玉合計額が高額になることも多いようです。なお、年末年始については1月1日が休日となるので、その日は近くのお寺に行ってお参りをする人も大勢います。

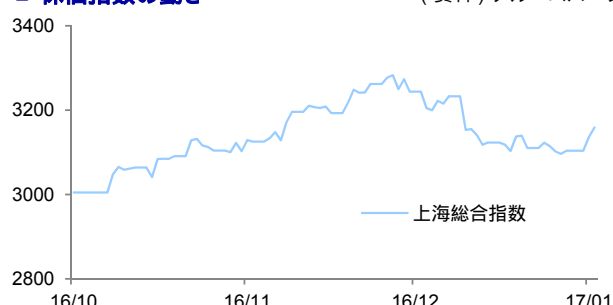
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	51.0	51.7	51.2
12/8	貿易収支(RMB建)	11月	320.00B	298.11B	325.25B
12/8	輸出(RMB建)(前年比)	11月	-1.0%	5.9%	-3.2%
12/8	輸入(RMB建)(前年比)	11月	3.6%	13.0%	3.2%
12/9	CPI(前年比)	11月	2.2%	2.3%	2.1%
12/9	PPI(前年比)	11月	2.3%	3.3%	1.2%

(資料) ブルームバーク

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.4200 ~ 1.4700
SGD/JPY 79.50 ~ 83.00

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

■ 先月の為替相場

12月のシンガポールドル(SGD)相場は、FOMC後にドル全面高となった流れの中でSGDも続落し、対ドルで7年ぶりの安値をつけた。

月初SGDは、11月末のOPEC減産合意を受けたドル買いの流れから1.43台半ばの安値圏でオープン。ただ、翌日に米雇用統計を控えてポジション調整が入り、発表前に1.42台半ばに戻した。2日の米11月雇用統計はほぼ予想通りの結果だったが、前月分が下方修正されたことから、SGDは1.41台後半へ続伸した。

翌週は、週末にイタリアで行われた憲法改正を問う国民投票が否決されたことを嫌気してユーロが急落して始まったため、SGDも1.42台半ばまで連れ安となったが、その後は新規材料難から1.42挟みでレンジ取引となった。週後半は、8日のECB理事会で、拡大資産購入プログラム(APP)につき、来年4月以降の購入規模縮小が決定されたことや、9日の米12月ミシガン大学消費者信頼感指数が予想を大幅に上回ったことが材料となり、SGDは1.43台前半まで下落した。

第3週はFOMCを控えたポジション調整によりSGDが1.42台前半まで買い戻された。14日のFOMCでは25bpの利上げが決定され、それ自体は織り込み済みだったが、メンバーによる金利見通しが年3回の利上げを見込んでおり、予想以上の利上げペースであったため、米ドル金利が急上昇し、ドル全面高となった。16日はシンガポール11月非石油輸出がマイナスの予想に対して前年比+11.5%の大幅拡大となったため一時SGDが買い戻されたが、海外市場で再びSGD安の流れとなった。

第4週は、前週の流れを引き継ぎアジア通貨が軒並み続落するなる中で、SGDも20日に1.45台前半をつけて2009年8月以来の安値を更新した。その後はクリスマスに向けて徐々に相場が閑散となり、1.44台半ば近辺で小動きとなった。

■ 今月の見通し

1月のシンガポールドル(SGD)相場は、トランプ次期政権の経済・財政政策、米ドル金利動向などを材料にドルが底堅い推移を予想する。

トランプ次期大統領の掲げる大型インフラ投資、大型減税などの財政政策に対する期待感と、それを受けた米ドル金利上昇の相乗効果によりアジア通貨安が加速した。期待感は選挙キャンペーン中のトランプ氏発言に基づくもので、現時点で具体的なことは何も明らかになっていないため、政策の具体的な方向性が示される第一歩として1月20日の一般教書演説が注目される。ただ、期待感を継続させるような内容となることが予想され、ドル高地合いが持続する可能性が高いと思われる。将来的には政策執行の実現性などの議論が出て来て、期待感剥奪からドルが反落するシナリオも考えられるが、それはもう少し先のこととなりそうだ。

また、これまでの言動から見てトランプ氏が保護主義的な通商政策を採る可能性が高いことは、貿易立国シンガポールにとって悪材料である。英国のEU離脱と相まってシンガポール経済への不透明感が強まっていることから、当面は多少の利食いをこなしながらも対ドルでSGD安基調が継続すると見ている。

シンガポール国内の材料としては、第2週に発表が予想されている10～12月期GDP(速報値)の発表が注目される。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

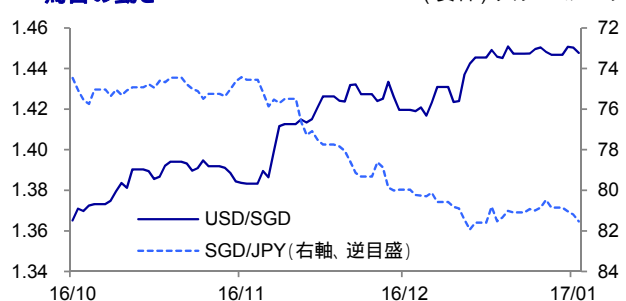
撈魚生(Lou-hei)って聞いたことあります？」シンガポール現地の人に聞かれて、「あれ？！それなんですか」って逆に私から質問を返した。色々と説明されましたが、どうやらシンガポールの旧正月に食べるおせち料理だそうです。それもやや一風変わった料理です。なぜかという、この料理は食べることでよりその前段階の演出を楽しむのがキモだからです。

まず、お皿に各種色鮮やかな野菜や調味料を乗せながら、一つ一つの作業に伴って、“吉祥話”(縁起の良い言葉)を言い、そして最後に“年々有餘”(魚と餘の発音が同じ)ということで、お魚の切り身を乗せる。これでお終いということではない、むしろここからが本番です。完成した料理に対して、「撈啊、撈啊、發啊、發啊(掬い上げろ！儲かるぞ！)」と叫びながら、撈魚生(Lou-hei)という料理を上にかき混ぜる、それも高くなれば高くなるほど縁起がいいということ、最後にお皿に残る量は果たしてどのくらいあるのかはやや疑問に思うが、なにせ楽しむためにある料理ですから、仕方ないことかもしれません。あとで自分で調べてみたが、この料理の出身地はどうか中国の広東あたりにある、つまり“粵菜”の一種です。それでLou-heiという発音なのかと頷きながら納得した私です。

色々を書きましたが、この原稿を書いている時点ではまだシンガポールの旧正月を経験したことがないので。なので、来る旧正月では、ぜひこの撈魚生(Lou-hei)を掬い上げながら新しい年でも“海撈一票”できるように祈りたいですね。(楊 成隆)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	購買部景気指数	11月	50.0	50.2	50.0
12/2	電子産業指数	11月	-	50.5	50.8
12/15	小売売上高(前年比)	10月	0.3%	2.2%	2.0%
12/16	非石油輸出(前年比)	11月	-2.7%	11.5%	-12.0%
12/23	CPI(前年比)	11月	0.0%	0.0%	-0.1%
12/23	鉱工業生産(前年比)	11月	1.6%	11.9%	1.2%

タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 35.40 ~ 36.50
THB/JPY 3.10 ~ 3.30

バンコック資金室 関 浩士

■ 先月の為替相場

●FOMCを経てドル高進行

1日、ドル/パーツは35.70パーツで取引を開始。11月消費者物価指数(CPI)は前年比+0.6%と、約2年ぶりの高水準となるも反応は限定的。アピサック財務相は来年のインフレターゲットを+1~4%に据え置く予定であると発表。2日に発表された米11月雇用統計が市場予想を下回ると、ドル/パーツは35.59パーツまで下落。その後、週を通して米金利が弱含む展開に、ドル高も一服するとドル/パーツは35.60パーツ近辺でレンジ推移となった。ウィラタイ・タイ中銀総裁は「タイ経済成長を阻む大きなリスクがあれば金融緩和する用意がある」「パーツ変動が過剰であれば中銀は介入する」と発言。8日に発表された11月消費者信頼感指数は72.3と前月から低下するも反応は限定的で、35.60パーツ近辺での推移が継続。ECB理事会は政策金利を据え置き、量的緩和策の月額購入額の減少を決定したものの相場の影響は限定的となった。9日には、特段材料の無い中、ドル買い優勢な展開が続くと、海外時間にはドル/パーツは35.70パーツまで上昇。14日はドル/パーツは35.55パーツにて取引を開始後、海外時間に注目のFOMCにて2017年度の利上げ見通しが年2回から3回へ上方修正されたことがサプライズとなると、ドルが急伸しドル/パーツは35.68パーツまで上昇した。

15日にも、ドル買い優勢な展開が継続すると、タイ中銀(BOT)の外貨準備高減少やドル高の流れを受け、16日にはドル/パーツは35.86パーツまで続伸。19日の海外時間には、イエレンFRB議長が「米経済成長がようやく大半の米国民の生活水準を押し上げつつある。労働市場はここ10年近くで最も力強い状況にある」との認識を示すと、ドル/パーツは35.90パーツまで上昇。20日には、10月につけた高値を抜けると、ロスカットを巻き込みながら1月以來となる36.00パーツを上抜けし、一時36.05パーツまで上昇した。21日には、BOTの金融政策委員会が開催され、政策金利は予想通り据え置きとなったが、タイ経済のダウンサイドリスクも懸念される内容に、月間高値となる36.07パーツまで上昇した。その後は、月末に掛け、クリスマス休暇に市場は閑散となると、35.95パーツから36.05パーツにて小幅な値動きとなった。クリスマス休暇明けのマーケットは、住宅ローン金利の上昇を背景に米11月中古住宅販売成約指数が予想よりも大きく低下したことや米5年債券入札の結果が良好だったことが材料視され株安、債券高で反応。米債利回りが低下したことからドル売り優勢となると、月末には35.78パーツまで下落した。

■ 今月の見通し

●ドル/パーツは底堅い動きが継続か

注目された12月のFOMCでは、市場の予想通り政策金利の25bp引き上げが決定され、政策金利のレンジは0.50%~0.75%となった。FOMC後に発表された声明では「労働市場が引き締め続け、経済活動は今年半ばから緩やかなペースで拡大。雇用の伸びはここ数か月堅調で、失業率は低下。短期的な経済見通しへのリスクは概ね均衡」との文言が見られた。2017年の政策金利の見通しも変更され、9月時点では2回の利上げ予想だったが、3回の利上げ予想となると、市場はタカ派と捉え米国金利が急騰すると、ドル買い優勢な展開となっている。

こもとのドル高地合いに対し、イエレン議長から牽制する発言も無かった事で、FEDとしては、現状の金利上昇やドル高が米経済に悪影響を与えることはない判断したものの印象。米国のトランプ次期大統領の財政支出拡大思惑による米国のインフレ懸念、米国の利上げ思惑、好調な米国経済指標と、足許はドル買い材料が並んでいる。

一方、タイ国内は国王崩御による経済への影響が懸念されている中で、11月タイ自動車生産台数は前年比+4.7%の170,784台と2か月ぶりにプラスに転換。来年の生産台数見込みが4年ぶりに200万台の万台に乗るとの予測も出ている。ファーストカー減税(初めて新車を購入する人に対する減税)策で購入した人の国内買い替え需要と原油価格の回復に伴う中東向け輸出の回復が期待されている。また、懸念される外国人旅行者は11月は前年比▲4.4%となる245万人となったが、中国を対象とした違法ツアーの摘発強化による中国人旅行者の前年比▲29.7%が主要因。年末年始には前年比+5%の観光客が見込まれているが、今後は中国旅行者の予想以上の落ち込みは警戒されるところ。BOTも12月21日の政策決定会合では、足許のタイ経済は、貿易相手国の予想を下回る成長や、方向性が不透明な米国の貿易政策による下振れリスク要因を指摘する一方、当初の見通しに近いペースで回復していると分析している。

皇太子への王位継承も完了した状況を踏まえ、タイ前国王崩御の影響を回避するべく政府がパーツ安を容認する事も想定される。マーケット全体では、米大統領選以降、ドル独歩高が進んできた。トランプ次期政権への期待先行という側面も大きいものの、1月20日の大統領就任まで、相場を反転させる材料が出てくる事は想定し難く、ドル/パーツは底堅い推移を見込む。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

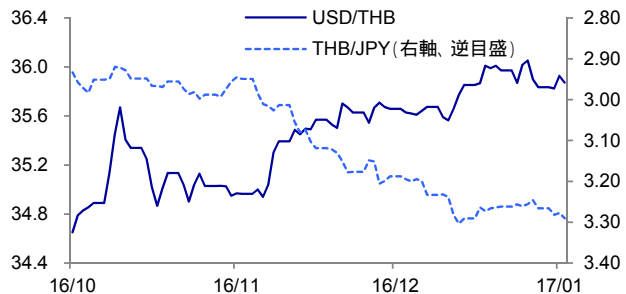
『当地のお正月事情』

タイの正月は、大きく「ソングクラン(タイの旧正月)」「春節祭(中国の旧正月)」「正月(新年)」と3回あります。タイ人にとっては4月13日~15日のソングクラン(水掛け祭り)が正月にあたるので、所謂日本の正月にあたる1月1日はどちらかというとカレンダーの年号が変わる程度の位置づけです。とは言え、大晦日には、タイの大都市では「カウントダウンイベント」が行われるのが恒例となっており、カウントダウンの瞬間には、大きな花火が続けざまに打ち上げられ、盛り上がりは最高潮に。都会のど真ん中でこんなに間近で花火が見れるというのは、びっくりです。ちなみに、去年は隣のマンションの敷地からもすごい勢いで花火が打ち上げられたのですが、本当に安全なのかと心配されます。移動手段で活躍するのがタクシーですが、空車が少なく、道路も渋滞しますが、BTS(都心内の鉄道)が大晦日は朝までノンストップで走ってます。普段は午前1時、2時にはクローズするパブなども、31日は特別に朝方まで営業する店もあります。然しながら、今年はタイ国王崩御の服喪により、花火は中止され、各種イベントも自粛される予定です。

また、タイでは正月(新年)は、一般的には家族で過ごす一日であり、普段バンコクに暮らす人達も、年末年始には実家に帰省する人が多くなります。そのため正月には、バンコク市内は普段よりも交通量が少なくなります。家族揃って1年最初の食事を頂き、いつもよりスペシャルなおかずを、新しい食器で頂くそうです。その後は、今年一年の祈願を仏間で行い、親戚や知人などが家に集まり、新年を祝うオレンジ(中華系)、色とりどりのタイのお菓子、その他ケーキなど、食べ物のお土産を交換するそうです。

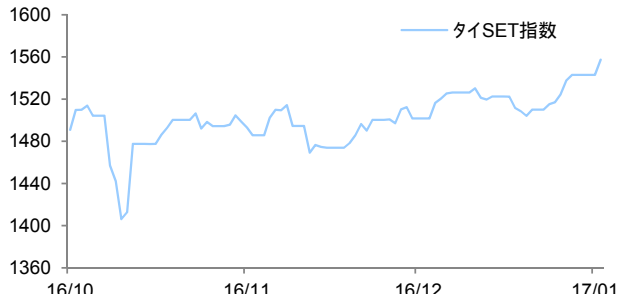
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	消費者物価指数(前年比)	11月	0.63%	0.60%	0.34%
12/1	CPIコア(前年比)	11月	0.72%	0.72%	0.74%
12/21	タイ中央銀行指標金利	-	1.50%	1.50%	1.50%
12/22	自動車販売台数	11月	-	64771	60634
12/26	輸出(通関ベース/前年比)	11月	2.05%	10.20%	-4.20%
12/26	輸入(通関ベース/前年比)	11月	-0.70%	3.00%	6.50%
12/26	通関貿易収支(USD)	11月	\$500M	\$1543M	\$248M
12/29	製造業生産指数	11月	0.40%	3.80%	0.00%
12/29	設備稼働率指数	11月	-	66.70	65.4
12/30	経常収支	11月	\$2600M	\$3195M	\$2875M

マレーシアリング相場

予想レンジ: USD/MYR 4.45 ~ 4.60
MYR/JPY 25.74 ~ 26.74

アジア・オセアニア資金部 宮地 崇

■ 先月の為替相場

先月のリング相場は4.46台前半でオープン。オープン後、前月末にOPEC総会で減産合意に至り原油価格は反発したことから、リングは強含む展開。2日には4.44台前半ばまで値を上げた。

5日には、2日の夜にマレーシア中銀(BNM)より新しい外貨に関する規制が発表されたことが好感されリングは上伸。7日に発表されたマレーシア10月輸出が大幅に鈍化したものの、影響は限定的。むしろ9日の予想比強いマレーシア10月鉱工業生産が支援材料となりリングはじわり上昇、4.42台前半まで買い進まれた。

12日はマレーシア祝日の為に休場。翌13日には、リングは4.42台前半で取引開始。週央にかけて、原油価格が軟調に推移すると軟調地合となり、4.44台前半ばまで下落。さらに14日のFOMCにて政策金利見通し(ドットチャート)で利上げペースが加速するとの予想が明らかとなりドル買いが進行、リングは4.46台後半まで下落。その後も米長期金利の上昇を背景に、リングは続落。オフショアNDFマーケットでもリング安が先行するなか、結局17年ぶりの安値となる4.48丁度をつけた。

月後半に入ると、年末に向けたドル買い需要にリングは上値の重い展開。一旦米長期金利が下落したことで、ややリングが買われるも大きな流れを形成するには至らず。21日にはマレーシア10月消費者物価指数(CPI)が予想比強い数字となるも、影響は限られた。その後はクリスマス控え、市場参加者が少なくなるなか、動意薄の展開となり、4.47台後半を方向感なく推移した。

月末週には、それまで緩慢な値動きが続いていたものの、オフショアNDF市場でのリング安の動きが牽引する形となり、それまでのリング安値である、4.48をブレイク。年末30日に4.4865と今年の最安値を付け安値圏で越年している。

■ 今月の見通し

先月発表されたマレーシアの経済指標は、総じて景気回復の足取りの重さを確認する格好となった。まずは、1日に発表された日経マレーシアPMIが47.1と今年最低水準まで鈍化。加えて、10月貿易収支は黒字が拡大したものの、急激な輸入の縮小が寄与した格好。輸出についても2か月連続で減少しており、先行きの見通しは決して明るいとは言えない状況となっている。もっとも、10月の鉱工業生産は4か月ぶりに拡大しており、一部では底入れを期待する向きもある。しかしながら、他のアジア諸国比やや景況感の力強さに欠ける点は否めず、ファンダメンタルズはリングの売り材料として機能しそうだ。

また、外国人投資家によるマレーシア国債売却の動きは依然として継続しており、マレーシア国債の外国人保有比率は他国対比高いことを踏まえると、米大統領選挙後の資金還流の流れは当面続く公算が大きい。

一方で、BNMの導入した新外貨規制が奏功し、足許リング安の騰勢は鈍化。オフショアNDFマーケットもリングの下落圧力は軟化している。加えて、リングが下落する局面では、BNMによるドル売り介入の思惑も根強い。今後、新規制が幅広く認知され、実際のオペレーションが進捗する過程では、リングの下値をサポートする可能性が大きい。

加えて、OPEC総会での減産合意や非加盟国を加えた15年ぶりの協調減産合意から、原油相場も底堅い値動きが続いている。原油相場が足許の値動きを維持できるのであれば、少なくとも従来のような原油安がリング安を招来する機会は減少しそうだ。

上記のマレーシアリングを取り巻く材料を勘案すると今月のリング相場は、上値が重い地合いは不変ながらも、今年7月以降のような一方にリングが売込まれる展開までには至らないものと予想する。

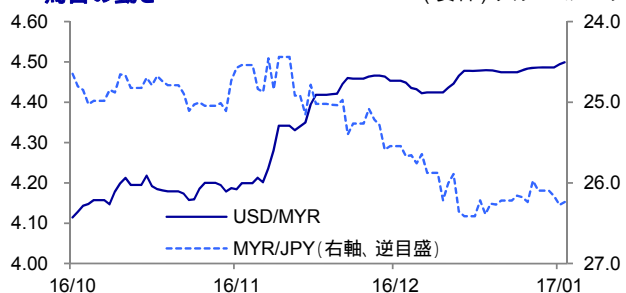
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

マレーシアでは日本のような正月を祝う感覚はなく、民族的にはイスラム教徒が殆どであるマレー系はラマダン明け、中華系は旧正月、インド系はディパバリが1年の区切りという感じでしょうか(町の飾り物、雰囲気的にも)。従ってグレゴリオ暦である1月1日はあくまで年が切り替わるだけで何か特別な思い入れがあるようには見受けられません。ただ勿論、「A Happy New Year」と盛り上がりはしますし、クアラルンプールであればツインタワーの傍の公園から日付が変わるタイミングで花火が打ち上がり、それ目的でたくさんの人が街に繰り出しています。今年は運良く、12月31日が土曜日なので3連休になりますが、通常の年は12月31日まで普通に平日で仕事、1月2日も普通に平日で仕事、ということで1月1日はあくまで祝日の1つという感じなのでしょう。従って年が明けたからと言って新年を祝う、仕事始めで挨拶回り、なんて言うこともなく、そもそも年の瀬を感じることもないので、駐在している身としても「あ一年が変わったな」程度です。とは言いつつそこは日本人。大晦日には年越し蕎麦、元日にはおせち料理を食べるということで年中夏で時間の移ろいに鈍感になりがちなの所に楔を打つ方々は多数おられるようです。(マレーシアみずほ 山田)

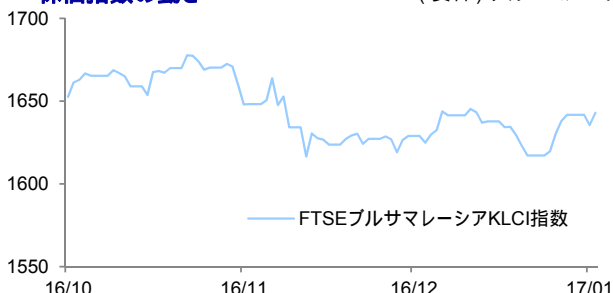
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/7	輸出(前年比)	10月	-5.6%	-8.6%	-3.0%
12/7	輸入(前年比)	10月	-0.1%	-6.6%	-0.1%
12/7	貿易収支(MYR)	10月	7.91b	9.76b	7.56b
12/9	鉱工業生産(前年比)	10月	3.4%	4.2%	3.2%
12/21	消費者物価指数(前年比)	10月	1.5%	1.8%	1.4%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13000 ~ 14000
 IDR/JPY 0.80 ~ 0.91
 JPY/IDR 110.00 ~ 125.00

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

インドネシアみずほ銀行 河合 良介

■ 先月の為替相場

12月のドル/ルピアは、米大統領選挙後の市場混乱の落ち着きを受けた海外からの資金流入により、月前半に下落した。しかし、FRBによる来年度の利上げ見通し引き上げを受けて上昇。その後は月末のドル買い需要を受けて反落した。

月前半、13580近辺でスタートしたドル/ルピアは、米大統領選挙後の市場混乱の落ち着きを受けた海外からの資金回帰から、8日には13270近辺まで下落した。7日に発表された11月外貨準備高が、前月比USD▲3.5bilの減少と、予想比小幅な減少となったこともサポート材料となった。その後、米12月FOMC待ちの13300近辺でのレンジ取引となった。1日に発表された11月消費者物価指数(CPI)は前年比+3.58%とほぼ予想どおりの結果となった。

15日、注目のFOMCにて、今年1回目の利上げが決定され、また、FRBの来年の政策金利見通し(ドットチャート)の中心値が2回⇒3回へ引き上げられると、ドル高の展開となり、13400近辺までルピアが売られた。その後、アジア通貨が対ドルで軟調な展開となる中、月末のドル買い需要も重なり、ルピアも軟調な展開が続き、12月23日10時現在、13470近辺での取引となっている。

インドネシア中央銀行(BI)は、FOMC翌日に開催された定例会合において、上記市場動向を考慮し、2か月連続で7日物リバースレポレートを4.75%に据え置いた。

■ 今月の見通し

今月のドル/ルピアは、月前半はレンジ取引、月後半(トランプ次期大統領正式就任後)は、ボラティルな相場地合いを予想。

ドル/ルピア市場は、11月中旬からの混乱は落ち着きを見せている。12月のFOMCにおいて、FRBの来年のドットチャートの中心値が2回⇒3回へ変更されたが、ルピアの下落幅は小幅なものに留まっている。23日現在、ジャカルタ株式総合指数が下落傾向が続いていることは気掛かりだが、海外投資家の国債投資が回復していること、11月末の外貨準備高減少幅が小幅に留まったこともサポート材料と言えるだろう。

1月20日のトランプ次期大統領正式就任までは、様子見ムードから、レンジ取引を予想する。その後の、同氏の発言に注目が集まるが、ポジティブ・ネガティブどちらの材料が出てきたとしても、ドル/ルピアはボラティルな値動きとなるのではないかと。

■ 今月のつばやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

インドネシアは、基本的に、1月1日の元旦のみ休日となります。

31日に大掃除、紅白歌合戦を見ながら年越しそばを食し、1日におせち料理を食しながら、新年の挨拶。そして、暴飲暴食からの惰眠、、、そんな生活に慣れ親しんだ私にとっては、この1日だけのお休みというのは、大変淋しく感じていました。

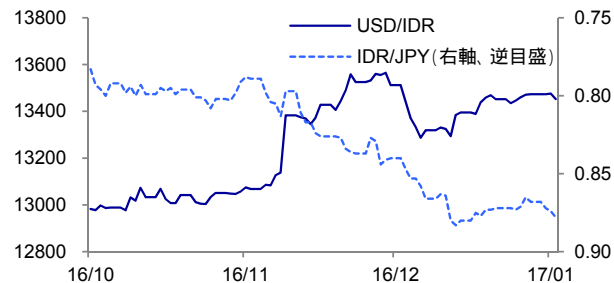
インドネシアには日本食スーパーもあり、おせち料理の注文もできます。

インドネシアでは、31日の22時頃からでしょうか、各地で花火が上がりはじめ、新年を迎えた0時以降も爆竹のような花火音が続きます。

おせち料理を食べながら、煙だらけの花火を眺め、泥酔のまま、深夜解酩。結局、疲れを引きずりながら、新年の初仕事を迎える、、、こんな、普段と何も変わることはないお正月を過ごしておりました。

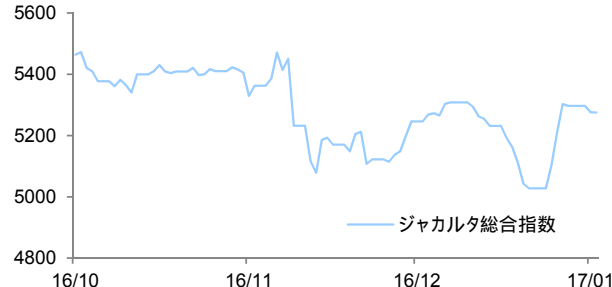
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	CPI(前年同月比)	11月	3.41%	3.58%	3.31%
12/7	外貨準備高(USD B)	11月	-	111.5	115.0
12/15	貿易収支(USD M)	11月	818	838	1,207
12/15	輸出(前年比)	11月	12.50%	21.34%	4.59%
12/1	BI 7daysリバースレポ金利		4.75%	4.75%	4.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 49.30 ~ 51.00
PHP/JPY 2.32 ~ 2.40

マニラ支店 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

2日(金)の海外時間に発表された米11月雇用統計は、非農業部門雇用者変化が市場予想通りの結果となり、前月分は下方修正、前々月分が上方修正された。失業率は4.6%と9年ぶりの低水準、一方、平均賃金は市場予想比下振れとなり、発表後の主要通貨は、市場参加者のドル買い持ちポジションを落とす動きからドル売りが優勢。

一方、改憲を問うイタリアの国民選挙は否決となり、レンツィ首相は辞任を発表したが、マッテレッラ伊大統領が予算案可決まで留任を要請し、レンツィ首相がこれを受諾したことからユーロは急反発、リスクオフを想定していた市場参加者には肩透かしとなった。

ビッグイベントが特段サプライズなく終わったことから5日のドル/ペソ為替相場(インターバンク・オンショア市場)は前週終値とほぼ同水準の1ドル=49.72ペソで取引開始となり、材料難で手掛けづらく、方向感のない動きに。10日には石油輸出国機構(OPEC)とロシアなどの非加盟の主要産油国がウィーンのOPEC本部で閣僚会合を開き、15年ぶりに協調減産で合意したからリスクオンが進み、ペソの買い戻しも期待されたものの、米金利の先行きを占う上で重要なイベントである14日の連邦公開市場委員会(FOMC)を前にしてドルの金利先高観が勝り、1ドル=49.80ペソ台へ上昇。一方、FOMC直前には当局と思しきドル売りペソ買いの取引(フロー)が見られ、1ドル=49.70ペソ台でFOMCを迎えた。

FOMCでは、市場予想通り政策金利は25bpの利上げとなったが、2017年の利上げ見通しが2回から3回に上方修正されたことが市場参加者の中ではサプライズとなり、米金利の上昇に連れて、主要通貨はドル買いで反応。ドル/ペソ為替相場も1ドル=50ペソ台を窺う地合に。

しかしながら、1ドル=50ペソ丁度には、当局と思しきドル売りペソ買いの注文が待ち構えており、上値が抑えられ、クリスマス休暇を前にして取引が細り始め、またアジア各国の当局が米大統領選挙後のドル高・自国通貨安に懸念を示していることが強く意識されたこともあり、ペソの買い戻しが進み、23日は1ドル=49.77ペソで取引終了となった。(23日16:00現在)

■ 今月の見通し

アジア各国は自国通貨安の防衛に腐心しているように見える。クリスマス休暇を前に市場の流動性は低下しており、そこに当局のフローや市場参加者の思惑的な仕掛けが入れば、値が飛びやすい。年末年始は例年以上にボラティルな市場環境となりそうである。

フィリピン中銀は現状の為替水準については懸念していない、とコメントしていたが、明らかに1ドル=50ペソを超えるペソ安については防衛しているとみられ、他のアジア通貨の動きとバランスを取っていると思われる。

さて今後のポイントは、ドルの金利先高観や堅調な米株式市場を背景としたドル買いの流れを当局がいつまで食い止めるか、になろう。

フィリピンの外貨準備は潤沢であり、外貨債務とのバランスにおいても健全性は高く、介入原資には現状懸念はない。国内(オンショア)と海外(オフショア)市場が分断されていることから投機的な取引も抑制されている。為替市場で取引されるペソ金利は上昇、市場参加者のペソ買い戻しがあってもおかしくはないだろう。

また、外国人投資家のフィリピン株売買動向においては、ここ2週間は再び大幅な売り越しに転じ、フィリピン大統領選挙後から積み上がってきた外国人の買い越し額をすべて吐き出したことから、セリングクライマックスを迎えた可能性はある。

しかしながらペソ買い材料がない中では、大きなドル買いの流れを止めることは難しそうだ。年内のペソ安トレンドは落ち着いたように見えるが、2017年初からは再びドル買いが進みそうである。(23日16:00現在)

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』
新年を迎えた途端、無数の花火と爆竹があちこちで炸裂。

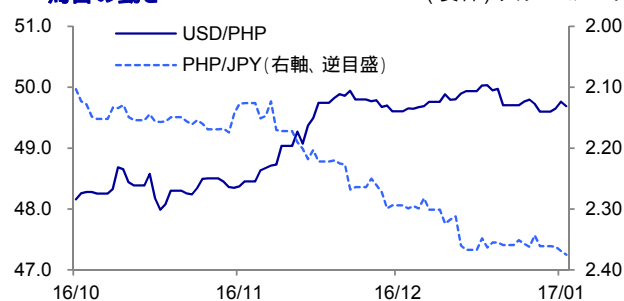
しかしながらキレイな花火を楽しめるのは直後のみ。

煙で周囲が見えなくなるぐらい爆竹が炸裂するとのこと。

高いところからの見物であれば問題ないのだろうか・・・

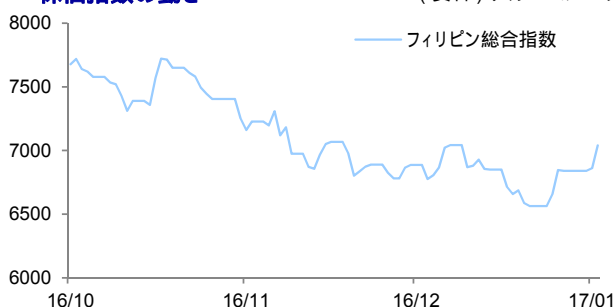
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記ご参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 67.00 ~ 69.50
INR/JPY 1.68 ~ 1.77

アジア・オセアニア資金部 田川 順也

■ 先月の為替相場

12月のドル/ルピー相場は下に往って来いの展開となった。

ドル/ルピーは68.40レベルで12月をオープン。懸念されていたイタリア国民投票を通過し、欧州株が堅調。リスクオフムードが後退したことに加え、トランプ次期大統領への期待を材料にしたドル高相場に一股感が出るとドル/ルピーも下落する展開。インド準備銀行(RBI)会合を前に3週間ぶり水準までルピー高が進行。

注目されていたRBI会合では7割を超える利下げ予想に反して全会一致で金利据え置きを決定。翌8日には当月の下値である67.33レベルまでルピーは伸伸び。

その後は一旦様子見ムードとなるも、高額紙幣廃止の影響に伴った軟調なインド経済指標が確認されたことに加え、予想外にタカ派となったFOMCを受けた米ドル全面高にドル/ルピーも水準を戻しに行く展開。23日現在でドル/ルピーは68.00レベルでの推移となっている。

尚、ルピー/円相場は1.67レベルでスタート。前述の通り、月初ドル/ルピーがルピー高に振れる中、ドル/円は114円を挟んでもみ合いの展開に、ルピー/円は上昇。FOMC後にドル/円が118円半ばまで円安が進行する展開に、ルピー/円も当月の高値である1.75近辺を示現。買い一巡後は落ち着いた展開に23日現在で1.73レベルでの推移となっている。

■ 今月の見通し

1月のドル/ルピー相場は底堅い展開を予想。

トランプ次期大統領への期待で上昇してきたドルに拍車をかけるようにFOMCは来年度の利上げ予想回数を上方修正。市場ではサプライズと捉えられ、ドルインデックスは14年ぶり水準の高値まで上伸している。現状のトランプ氏への期待はいささか行き過ぎ感満載であるが、同氏の大統領就任は1月20日であり、それまでは政策について具体的な発言がされず、また野党からの批判も入りにくいことを考えれば、現状の期待が1月についても継続し、米金利、米ドル、米株式の下支えとなろう。また、次回FOMCは2月2日。それ以前にメンバー個別のスピーチは複数予定されているが、12月発表したばかりのプロジェクションと整合性がとれない発言をすると思えず、利上げ期待についても継続を想定しておいた方がリーズナブルと思え、総じて米ドルが為替市場で選好されやすい地合いが続くだろう。

一方で、インド要因では高額紙幣廃止に伴い経済指標が急減速。サービス業PMIは統計開始後最低水準。消費者物価指数(CPI)はRBIが連続利上げをする前である2014年末の水準まで下落している。モディ首相は「50日間我慢してほしい」と演説、RBIは廃止の影響を“only for a transitory period”としているが、上記の指標や旧紙幣回収分の4割程度分しか新紙幣の供給ができていないことを考えると、消費の落ち込みやそれに伴う物価下落などの悪影響は想定よりも長く続きそうか。1月発表の指標でも減速感が濃ければ、RBI利下げを想起され、基調としてインドルピー安方向を見ておきたい。

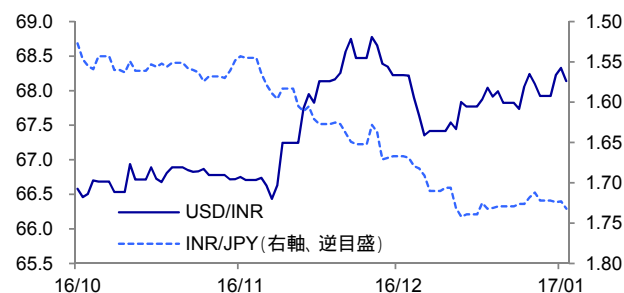
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地のお正月事情』

インドも暦上、新年は1月1日ですが、地域によりお正月を祝う時期が異なります。北インドの新年といえば10月中旬の「ディワリ」と呼ばれるヒンドゥー教の新年祭です。日本でも報道されていますが煙による健康被害となるほど花火を打ち上げ、爆竹を鳴らし、嫌というほど人々ははじけるため、西暦でのお正月はいたって地味、特筆すべきことはあまりありません。政府系機関は元旦は祝日ではなく、州政府が定める祝日リストに基づき営業している店も三が日はもちろん、元旦も営業日です。しかしながらお客様企業はお休みのところが多く、毎年、年末年始のオフィスはそれはそれは静かです。(ニューデリー 長谷川)

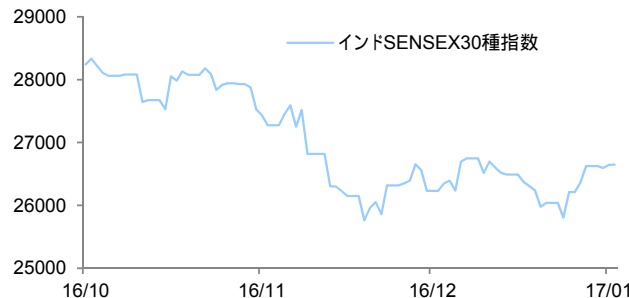
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

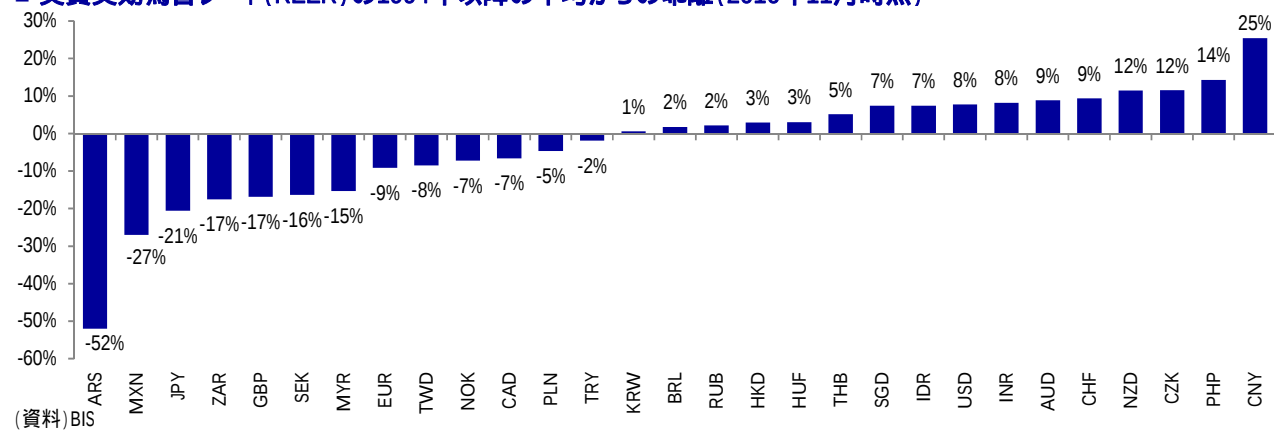
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	日経インドPMI製造業	11月	-	52.3	54.4
12/5	日経インドPMIサービス業	11月	-	46.7	54.5
12/7	RBIレポート	-	6.00%	6.25%	6.25%
12/9	鉱工業生産(前年比)	10月	1.0%	-1.9%	0.7%
12/13	消費者物価指数(前年比)	11月	3.90%	3.63%	4.20%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2015年末	2016年12月末	騰落率	株式市場	2015年末	2016年12月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	17425.03	19762.6	13.4%	-
日本	USD/JPY	120.22	116.96	-2.7%	日経平均株価	19033.71	19114.37	0.4%	3.2%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0862	1.0517	-3.2%	ドイツDAX指数	10743.01	11481.06	6.9%	6.9%
英国	GBP/USD	1.4736	1.234	-16.3%	ロンドンFTSE100指数	6242.32	7142.83	14.4%	36.6%
豪州	AUD/USD	0.7286	0.7208	-1.1%	S&P/ASX200指数	5295.9	5665.8	7.0%	8.1%
カナダ	USD/CAD	1.3839	1.3441	-2.9%	S&Pトロント総合指数	13009.95	15287.59	17.5%	21.0%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.4937	6.945	6.9%	上海総合	3539.182	3103.637	-12.3%	-18.0%
香港	USD/HKD	7.7507	7.7559	0.1%	香港ハンセン	21914.4	22000.56	0.4%	0.3%
インド	USD/INR	66.1537	67.9238	2.7%	インドSENSEX30種	26117.54	26626.46	1.9%	-0.7%
インドネシア	USD/IDR	13788	13473	-2.3%	ジャカルタ総合	4593.008	5296.711	15.3%	18.0%
韓国	USD/KRW	1175.06	1205.83	2.6%	韓国総合株価	1961.31	2026.46	3.3%	0.7%
マレーシア	USD/MYR	4.2943	4.4862	4.5%	ブルサマレーシアKLCI	1692.51	1641.73	-3.0%	-7.1%
フィリピン	USD/PHP	46.905	49.6	5.7%	フィリピン総合	6952.08	6840.64	-1.6%	-6.9%
シンガポール	USD/SGD	1.4185	1.4468	2.0%	シンガポールST	2882.73	2880.76	-0.1%	-2.0%
台湾	USD/TWD	32.862	32.326	-1.6%	台湾加権	8338.06	9253.5	11.0%	12.8%
タイ	USD/THB	36.03	35.835	-0.5%	タイSET	1288.02	1542.94	19.8%	20.4%

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2016年11月時点)



■ 実質GDP成長率

	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2015	2016
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.6	2.0	0.9	0.8	1.4	3.5		2.6	
日本*	-0.5	0.8	-1.8	2.8	1.8	1.3		1.2	
ユーロ圏	2.0	1.9	2.0	1.7	1.7	1.7		2.0	
英国	2.4	1.8	1.7	1.8	2.0	2.2		2.2	
豪州	2.0	2.4	2.6	2.5	3.1	1.8		2.4	
カナダ*	-0.5	2.3	0.5	2.7	-1.3	3.5		1.0	
エマージングアジア									
中国	7.0	6.9	6.8	6.7	6.7	6.7		6.9	
香港	3.1	2.3	1.9	0.8	1.7	1.9		2.4	
インド	7.5	7.6	7.2	7.9	7.1	7.3		7.6	
インドネシア	4.7	4.7	5.0	4.9	5.2	5.0		4.8	
韓国	2.2	2.8	3.1	2.8	3.3	2.6		2.6	
マレーシア	4.9	4.7	4.5	4.2	4.0	4.3		5.0	
フィリピン	5.9	6.2	6.5	6.8	7.0	7.1		6.3	6.9
シンガポール	1.7	1.8	1.8	2.1	2.1	1.2	1.8	2.0	1.8
台湾	0.7	-0.7	-0.8	-0.2	1.1	2.0		0.7	
タイ	2.7	2.9	2.8	3.2	3.5	3.2		2.8	

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	16/05	16/06	16/07	16/08	16/09	16/10	16/11	2014	2015
	(%)							(%)	
先進国									
米国	4.7	4.9	4.9	4.9	5.0	4.9	4.6	6.2	5.3
日本	3.2	3.1	3.0	3.1	3.0	3.0	3.1	3.6	3.4
ユーロ圏	10.1	10.1	10.0	10.0	9.9	9.8		11.6	10.9
英国	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.8		6.3	5.4
豪州	5.7	5.8	5.7	5.6	5.6	5.6	5.7	6.1	6.1
カナダ	6.9	6.8	6.9	7.0	7.0	7.0	6.8	6.9	6.9
エマージングアジア									
中国		4.1			4.0			4.1	4.1
香港	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.3	3.2	3.3
インドネシア				5.6				5.8	6.0
韓国	3.7	3.6	3.6	3.8	4.0	3.7	3.6	3.5	3.6
マレーシア	3.4	3.4	3.5	3.5	3.5	3.5		2.9	3.2
フィリピン			5.4			4.7		6.8	6.3
シンガポール		2.1			2.1			2.0	1.9
台湾	4.0	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	4.0	3.8
タイ	1.2	1.0	1.0	0.9	0.9	1.2	1.0	0.8	0.9

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	16/06	16/07	16/08	16/09	16/10	16/11	16/12	2015	2016
	(前年比%)							(前年比%)	
先進国									
米国	1.0	0.8	1.1	1.5	1.6	1.7		0.1	
日本	-0.4	-0.4	-0.5	-0.5	0.1	0.5		0.8	
ユーロ圏	0.1	0.2	0.2	0.4	0.5	0.6	1.1	0.0	0.2
英国	0.5	0.6	0.6	1.0	0.9	1.2		0.0	
豪州	1.0			1.3				1.5	
カナダ	1.5	1.3	1.1	1.3	1.5	1.2		1.1	
エマージングアジア									
中国	1.9	1.8	1.3	1.9	2.1	2.3		1.4	
香港	2.4	2.3	4.3	2.7	1.2	1.2		3.0	
インド	5.8	6.1	5.1	4.4	4.2	3.6		5.9	
インドネシア	3.5	3.2	2.8	3.1	3.3	3.6	3.0	6.4	3.5
韓国	0.7	0.4	0.5	1.3	1.5	1.5	1.3	0.7	1.3
マレーシア	1.6	1.1	1.5	1.5	1.4	1.8		2.1	
フィリピン	1.9	1.9	1.8	2.3	2.3	2.5		1.4	
シンガポール	-0.7	-0.7	-0.3	-0.2	-0.1	0.0		-0.5	
台湾	0.9	1.2	0.6	0.3	1.7	2.0		-0.3	
タイ	0.4	0.1	0.3	0.4	0.3	0.6	1.1	-0.9	0.2

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2015Q1	2015Q2	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2015	2016
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.3	-2.4	-2.5	-2.5	-2.6	-2.6	-2.6	-2.6	
日本	1.7	2.2	2.8	3.1	3.4	3.5	3.7	3.1	
ユーロ圏	2.6	2.9	3.1	3.1	3.1	3.3	3.2	3.1	
英国	-4.6	-4.6	-4.3	-4.3	-4.4	-4.6	-5.1	-4.3	
豪州	-3.3	-5.1	-5.0	-5.6	-3.6	-3.8	-2.7	-4.8	
カナダ	-2.8	-3.0	-3.3	-3.4	-3.3	-3.5	-3.5	-3.4	
エマージングアジア									
中国	3.3	3.2	3.0	3.0	2.6	2.4	2.4	3.0	
香港	1.3	2.6	3.2	3.3	3.9	4.4	4.2	3.3	
インド	-1.3	-1.3	-1.1	-1.1	-1.1	-0.8	-0.5	-1.1	
インドネシア	-3.0	-2.5	-2.2	-2.1	-2.1	-2.1	-2.1	-2.1	
韓国	6.7	7.0	7.6	7.7	7.9	7.9	7.3	7.7	
マレーシア	3.5	2.7	2.5	2.9	2.4	1.9	1.9	2.9	
フィリピン	4.1	4.1	3.4	2.6	2.1	1.0	1.0	2.6	
シンガポール	20.3	19.5	19.3	19.8	19.2	20.7	21.7	19.8	
台湾	13.2	13.2	14.1	14.5	14.3	14.6	14.2	14.5	
タイ	4.6	5.7	7.3	8.2	10.3	11.2	12.0	8.2	16.6

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.50 - 0.75	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2016/12/15	25	2016/12/15	+25bp
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2016/12/20	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2016/12/8	現状維持
英国	バンク・レート	0.25	緩和: 2007/12/6	5.75	2016/8/4	-25	2016/12/15	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2016/12/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.50	緩和: 2015/7/15	1.00	2015/1/22	-25	2016/12/8	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レボ金利	6.25	緩和: 2015/1/15	8.00	2016/10/4	-25	2016/12/7	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.75	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/10/20	-25	2016/12/15	現状維持
韓国	7日物レボ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2016/12/15	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2016/11/23	現状維持
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2016/12/22	現状維持
タイ	翌日物レボ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2016/12/21	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をB1レートから7日物リバースレボレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行